

年度計画	
<p>中期計画</p> <p>オ 安心かつ信頼できる質の高い医療の提供</p> <p>郡民が住み慣れた地域で安心して生活を送るため、重点医療のみならず、地域においてセンターが担うべき医療機能に合わせた質の高い医療の提供に努めるとともに、組織的に医療安全対策に取り組み、安心かつ信頼される医療の確保を図る。</p>	<p>オ 安心かつ信頼できる質の高い医療の提供</p> <p>センターの特性を活かした質の高い医療を提供するとともに、組織的な医療安全対策に取り組み、安心かつ信頼して医療を受けられる体制を強化する。</p>

年度計画	
<p>中期計画の進捗状況</p>	<p>＜より質の高い医療の提供＞</p> <p>【中期計画の達成状況及び成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> 高齢者特有の疾患に対応した専門外来の充実のため、新たに「フレイル外来」を開設して栄養指導を含めた包括的な治療の提供を開始したほか、糖尿病や嚥下不全に係る認定看護師資格の取得等を積極的に支援するなど、高齢者の特性に合わせた最適な医療提供体制の強化を図った。 昨年度導入した病棟薬剤業務日誌システムの活用により業務の効率化が図られ、より多くの患者に対して安心・安全で専門性の高い薬物療法を提供したほか、禁食からの経口摂取の再開を安全かつスムーズに行えるよう経口開始チャートを新たに作成するなど、医療に関わる各分野においてその充実に取り組んだ。 <p>【特記事項】</p> <p>【今後の課題】</p>

年度計画		年度計画に係る実績																									
<p>中期計画</p> <p>(7) より質の高い医療の提供</p> <p>○ 重点医療のみならず、高齢者の特有の疾患に対応するため、各分野において医療の充実を図るとともに、多職種協働による医療の提供を実践する。</p>	<p>自己評価</p> <p>7 B</p>	<p>(7) より質の高い医療の提供</p> <ul style="list-style-type: none"> 高齢者に特有の疾患に対応するケア外来について、各種疾患に対応した認定看護師を専任で配置し、より専門性の高いケアを提供した。認定看護師と医師が協働して患者目標を心掛けた、身体的・精神的に負担の少ない療養支援を行った。また、在宅におけるケア方法について患者家族とともに検討し、無理なく継続できるケアの実施を支援した。 <p>■平成27年度実績（専門外来）</p> <table border="1"> <tr> <td>もの忘れ外来</td> <td>1,688人</td> <td>(平成26年度)</td> <td>2,133人</td> </tr> <tr> <td>フットケア外来</td> <td>443人</td> <td>(平成26年度)</td> <td>511人</td> </tr> <tr> <td>ストーマ・スキンケア外来</td> <td>422人</td> <td>(平成26年度)</td> <td>432人</td> </tr> <tr> <td>ロコモ外来</td> <td>417人</td> <td>(平成26年度)</td> <td>357人</td> </tr> <tr> <td>さわやかケア外来（※1）</td> <td>71人</td> <td>(平成26年度)</td> <td>42人</td> </tr> <tr> <td>フレイル（※2）外来</td> <td>232人</td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <ul style="list-style-type: none"> 平成27年10月より新たに「フレイル外来」を開設し、フレイルの評価を行うとともにその原因となる疾患の包括的な治療と栄養、運動などの生活指導を行った。 （※1）排尿障害に関する専門外来 （※2）高齢期に生理的予備能が低下することで、ストレスに対する脆弱性が亢進し、さまざまな他臓障害を起しやすいため、フレイルリスクな状態。 	もの忘れ外来	1,688人	(平成26年度)	2,133人	フットケア外来	443人	(平成26年度)	511人	ストーマ・スキンケア外来	422人	(平成26年度)	432人	ロコモ外来	417人	(平成26年度)	357人	さわやかケア外来（※1）	71人	(平成26年度)	42人	フレイル（※2）外来	232人			<p>年度計画</p> <p>(7) より質の高い医療の提供</p> <p>○ もの忘れ外来や骨粗鬆症外来、ロコモ外来など、高齢者特有の疾患に対応した専門外来を充実させ、身体的・精神的に負担の少ない医療を提供する。</p> <p>○ オーダーメイド骨粗鬆症治療をさらに推進するとともに、がんをはじめとするその他の疾患に対する個別化医療の推進に向けて取り組む。</p> <p>■平成27年度目標値</p> <p>オーダーメイド骨粗鬆症治療システム新規登録件数25例</p>
もの忘れ外来	1,688人	(平成26年度)	2,133人																								
フットケア外来	443人	(平成26年度)	511人																								
ストーマ・スキンケア外来	422人	(平成26年度)	432人																								
ロコモ外来	417人	(平成26年度)	357人																								
さわやかケア外来（※1）	71人	(平成26年度)	42人																								
フレイル（※2）外来	232人																										

<p>○ 薬剤師による入院患者持参薬の確認を引き続き行うとともに、薬剤師を病棟に配置し、投与前の薬剤確認から退院後の服薬指導まで一貫した薬剤管理を行うなど、専門性の高い医療を提供する。</p> <p>■平成27年度目標値 薬剤管理指導業務算定件数13,000件</p>	<p>○ 病棟薬剤業務実施加算の算定要件である病棟薬剤業務日誌の作成について、システムを活用することにより、薬剤師の病棟常駐業務について効率化が図られ、昨年度以上に服薬指導を行うことが可能となった。これにより、より多くの患者に対して安心・安全で、専門性の高い薬物療法を提供することができた。</p> <p>■平成27年度実績 薬剤管理指導業務算定件数 14,138件 (26年度 13,003件)</p>
<p>○ 栄養サポートチーム、退院支援チーム、精神科リエゾンチームをはじめとする専門的知識・技術を有する多職種協働によるチーム医療を推進し、患者の早期回復、重症化予防に取り組み、早期退院につなげる。</p>	<p>・医師、歯科医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、管理栄養士からなる栄養サポートチームによる栄養介入を延べ264人に対して実施し、患者の栄養状態の評価及び適切な栄養必要量や栄養補給の方法等の検討を進めた。また、栄養管理・コミュニケーションの見直しを進めるとともに、経口摂取開始のためのチャートを更新し、医師、看護師を中心に配布するなど、多職種が協働し、患者の栄養状態の改善を支援した。</p> <p>・退院支援チームによる患者に適した退院支援、精神科リエゾンチームによる認知症患者、せん妄患者、その他の精神科的問題を抱える患者への評価・治療などを実施し、チーム医療の推進による患者の早期回復と重症化予防に積極的に取り組んだ。</p>
<p>○ 高齢者のうつ病をはじめとした気分障害、妄想性障害などの精神疾患の診断・治療を充実するとともに、近隣医療機関との連携に努める。</p>	<p>・認知症専門相談室における受療相談、連携医療機関からの紹介による緊急入院対応、精神科リエゾンチームによる一般病棟入院中の患者の精神医学的評価サポートを行い、認知症、せん妄の老年期うつ病などの気分障害、妄想性障害に代表される老年期精神障害の診断、治療を実施した。平成27年度はうつ病を含む気分障害の患者を115名(平成26年度名119名)、妄想性障害を含む精神障害性障害の患者について29名(平成26年度43名)の入院診療を実施した。</p>
<p>○ 医師、医療技術職、看護師等の職員の専門性の向上を図るため、専門的かつ高度な技術を有する職員の育成に努めるとともに、DPC データの分析やクリニカルパスなどの検証を通じて、医療の質の向上を図る。</p>	<p>・総合内科専門医を始めとした専門医資格取得の支援を継続した。(平成27年度計4件)</p> <p>・看護師の専門能力の向上のため、資格取得にあたっての研修派遣等を計画的に推進した。その結果、「糖尿病看護認定看護師」1名、「慢性心不全認定看護師」1名が合格するなど、より熟練した看護技術を有する看護師の育成を図った。また、「NST 専門療法士」に1名が合格するとともに、「弾性ストッキングコンダクター」に1名、「トリアージナース」に2名が認定されるなど、より専門的な知識を有する人材の育成に努めた。</p>
<p>○ 各委員会を中心に、DPC データやクリニカルパスなどの分析及び検証を行い、医療の標準化・効率化を推進することで、医療の質の向上を図る。</p>	<p>・DPC・原価計算経営委員会において適切なDPCコーディングがされているか確認を行った。また原価計算WGと統合し、各診療科における収益および費用を正確に把握するために検証・実施を行い、医療の標準化・効率化に取り組んだ。</p> <p>・クリニカルパス推進委員会を中心として、術前検査センターの更なる活用やクリニカルパスの適用疾患の拡大などに努め、医療の標準化と効率化を推進した。また、DPCデータを用いて既存のクリニカルパスを分析・検証することで、医療の質の向上に努めた。</p> <p>■平成27年度実績 クリニカルパス数 80種(平成26年度 72種)</p>
<p>○ 医療の質の指標(クオリティインディケーター)を検討・設定し、センターの医療の質の客観的な評価・検証を行うとともに、医療内容の充実に活用していく。</p>	<p>・医療の質の評価委員会及び医療の質評価指標ワーキンググループにおいて、医療の質の評価指標を検討するとともに、評価指標を利用した医療の質の改善について検討を行った。計7回のワーキンググループにおいて、有料個室の利用促進に向けたアンケート調査の実施や逆紹介を推進するための連携医マッピングの作成等の改善策を話し、センターの医療の質及び安全性の向上を図った。</p> <p>・多職種による「医療の質改善ワークショップ」を開催し(年1回)、ワークショップにおいて得られた診療業務の問題点や課題は、ワーキンググループにて引き続き議論を行い、成果の還元を図った。</p> <p>・「平成27年度全国自治体病院協議会 医療の質の評価・公表事業」に参加し、医療の質の指標データを提出した。また、センターの指標を他病院と比較し、医療の質の改善に取り組んだ。</p>

	<p>＜医療安全対策の徹底＞</p> <p>【中期計画の達成状況及び成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成27年10月より開始された医療事故調査制度を踏まえ、死亡事例における院内での病理解剖や画像診断の推進を図ったほか、安全管理マニュアルの見直しや新たに「院内事故調査委員会設置要綱」を策定して体制整備を進めるなど、センターが今後とも都民から信頼されるために、医療安全対策に係る取組を徹底して行った。 ・全職員を対象とする院内感染対策講演会を行い、2年連続で参加率100%。(テスト提出を含む)を達成したほか、感染対策チーム(ICT)によるラウンドを引き続き積極的に行うなど、効果的な院内感染対策の実施に努めた。 <p>【特記事項】</p> <p>【今後の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平成28年6月に予定されている医療事故調査制度の見直しについて、その内容を踏まえた上で引き続き適切に対応を行っていく。
中期計画の進捗状況	

中期計画	年度計画	自己評価	年度計画に係る実績
<p>(1) 医療安全対策の徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 都民から信頼される医療機関として、医療安全管理体制の更なる充実を図るとともに、地域の医療機関と定期的に院内感染防止策の検討を進めるなど、地域全体で感染防止対策に取り組む。 	<p>(1) 医療安全対策の徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 安全管理委員会を中心に、医療安全に対するリスク・課題の把握と適切な改善策を実施することで、医療安全管理体制の強化を図る。また、研修や講演会等を通じて、職員の医療安全に対する意識の向上に努め、事故を未然に防ぐ体制を確立する。 	8 B	<p>(1) 医療安全対策の徹底</p> <ul style="list-style-type: none"> ・医療事故調査制度の開始に基づき、医療事故発生時の対応策等を検討するための組織体制などを定めた「緊急事故対策委員会・事故調査委員会設置要綱」を改訂し、新たに外部委員を含めた「院内事故調査委員会設置要綱」を設けるなど、医療安全体制のさらなる強化を図った。 ・「医療事故調査制度」の運用開始に伴い、死亡事例における院内での病理解剖の推進を図ったほか、死亡時画像診断についての院内ワーキンググループを立ち上げ、死亡時画像診断運用ガイドラインと運用手順の作成を行い、同診断をスタートさせた。 ・全職員を対象として、院内メールにより「医療事故調査制度についてのQ&A」を複数回で配信した(全11回)。本メールには、各部署での確実な周知を目的として、同Q&Aについて掲示が可能なポスタータイプのものを添付し、周知徹底を図った。 ・職員を講師とした安全管理講演会を開催し、日頃の安全管理に関する取組や他の職種の業務に関する理解促進を目的とした研修、新たに運用が開始された医療事故調査制度に関する研修等を行い、職員の意識と知識・技術の向上を図った。 <p>■平成27年度実績</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成27年度第1回安全管理講演会：「～みんなで取り組もう医療安全～」(平成27年6月) 平成27年度第2回安全管理講演会：「医療事故調査制度等について」(平成27年11月) ・医療安全と院内感染対策の合同の講演会として、「みんなを取り組む感染対策と医療安全」をテーマとした外部講師によるWEB講演会を開催した。(平成27年9月) ・薬剤、規格、用法、剤形などの変更について、一定のルールに基づき薬剤師が処方修正(月300件程度)や医師への提案を行うことで、薬学的患者ケアの推進や副作用の重篤化の回避、医師の業務軽減等を実現した。 ・肺血栓塞栓症予防チャーターの項目等の見直しを行うとともに、チャーターをデータ化し電子カルテ上に表示することで、簡便かつ漏れのないチェックが可能となり、より計画的な医学管理の策定と適切な処置の提供体制を構築した。 ・平成28年2月にリスクマネジメント推進会議のメンバーによる医療安全パトロールを行い、各部署の環境が安全に保たれ、マニュアルの手順が遵守されているかについての確認を行った。 ・安全管理委員会及びリスクマネジメント推進会議にて、救急カート内に装備する医薬品等の検討を行った。使用頻度が低くかつ危険性の高い医薬品の装備の見直しにより、安全で使いやすいややく無駄のない運用体制を構築し、救急時により迅速、安全な処置が可能となった。

<p>○ 組織的な医療安全対策に取り組むため、セーフティマネージャーを中心に医療安全に係る院内や他の医療機関の状況把握・分析を行うとともに、その結果に基づき医療安全確保の業務改善を図る。</p>	<p>○ 転倒、転落及びせきん妄などについて、回避・軽減に有効な手法を検証し、フライトの設置や床ワックスの検討など、高齢者に必要かつ安全な療養環境を整備する。 ■平成27年度目標値 転倒・転落事故発生率 0.25%以下</p> <p>○ 感染防止対策チームを組織する医療機関と定期的な協議を実施するなど、地域ぐるみで感染防止対策に取り組む。</p>	<p>・転倒転落事故を防止するため、インシデント・アクシデントレポートの分析や離床センサーの活用、スタッフ間の情報共有に努めたほか、転倒転落防止アセスメントシートについても改訂を行い、患者の状態を数値化して患者のADL（日常生活動作）、理解力、病状等の把握を容易にする取り組みを行った。また、患者や家族への説明と注意喚起についての文書をより分かりやすいものに変更し、事故予防対策の周知を図った。 ■平成27年度実績 転倒・転落事故発生率 0.37%（平成26年度 0.33%）</p> <p>・校務区内で、院内に感染防止対策チームを有する医療機関と感染防止対策連携カンファレンス（医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師が参加）を年4回実施し、各施設における感染対策に関する情報共有や相互の病院ラウンドを実施した。新型インフルエンザ等の発生に備え、地域の医療機関等との協力関係の強化に努めるとともに、発生時の対応等について検討を行うなど、必要な体制の整備を進めた。【再掲：項目06】</p>
<p>○ 組織的な医療安全対策に取り組むため、セーフティマネージャーを中心に医療安全に係る院内や他の医療機関の状況把握・分析を行うとともに、その結果に基づき医療安全確保の業務改善を図る。</p>	<p>○ インシデント・アクシデントレポートなどでセンターの状況把握・分析を行うとともに、他の医療機関の取組を参考に、事故発生時に迅速かつ適切な対応を行うことができる体制を強化する。</p>	<p>・リスクマネジメント推進会議及び安全管理委員会において、インシデント・アクシデントレポートの集約・分析を行い、特に注意喚起事例に関しては、部門別で具体的な事例を挙げ、その要因と再発防止策の検討を行うとともに、病院幹部会議での報告や全職員が閲覧できるフォルダに掲載し周知徹底を図るなど、医療安全管理体制の強化及び業務改善を図った。また、他の医療機関における事故事例や日本医療機能評価機構から提供される医療安全情報など、広く情報収集を行い、院内での事故防止に役立てた。 ・「医療事故調査制度」の運用開始及び病院機能評価の受審に向け、安全管理マニュアルの見直しを行った。</p>
<p>○ 院内感染対策チームを中心に院内感染に関する情報を分析・評価するとともに、病棟ラウンドの所見等をもとに、効果的に院内感染対策を実施する。</p>	<p>○ 感染対策チーム(ICT)によるラウンドを定期的に実施して院内感染の情報収集や分析を行い、効果的な院内感染対策を実施する。また、全職員を対象とした研修会や院内感染に関する情報をメールや院内掲示板を活用して職員に周知し、感染防止対策の徹底を図る。 ■平成27年度目標値 院内感染症対策研修会の参加率92%</p>	<p>・定期的なラウンドとして、①感染対策チーム（ICT）が中心となり血液培養陽性者に対して行うICTラウンド、②広域抗菌薬の使用状況確認ラウンド、③感染管理認定看護師が単独で行う感染管理ラウンド、④清掃ラウンドの4種類を行った。また、定期的なラウンドのほかにも、同じ感染症が同一部署で2例以上発生した場合においては、臨時ラウンドを実施し、徹底した感染防止策を実施した。 ・院内感染対策協議会を年3回開催した。不参加職員へのフォローとして、講演会を録画したビデオ上映会の開催や感染管理システムを活用したeラーニング受講の徹底や感染の標準予防策に関する知識確認テストを実施することにより、研修会参加率100%（テスト提出含む）を達成した。このほか、手術部位感染対策として、外部講師を招聘した講演会を開催するなど感染防止対策の徹底を図った。 ■平成27年度実績 院内感染症対策研修会の参加率 100%（平成26年度実績 100%） ・日常的な感染対策については、感染管理認定看護師が感染管理システムを利用し、細菌検査室からタイムリーに情報を確認し、現場での感染対策が即時開始されるように各部署と連携して対応した。 ・自施設で作成した感染管理ベストプラクティスに関して、手順の遵守状況を確認するため、看護師を対象に感染対策チームが中心となってチェックを行い、オムツ交換、ポータブルトイレ介助、開放式吸引、点滴準備などの各処置における手順をモニター・評価し、遵守率の向上を図った。 ・マスメディアを通じて他病院の院内感染の事例が公表された際には、速やかにセンターの状況を確認した上で注意喚起を行った。</p>

<p>中期計画の進捗状況</p>	<p>＜患者中心の医療の実践・患者サービスの向上＞</p> <p>【中期計画の達成状況及び成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 患者中心の医療や患者サービスの根本となるセンターの基本理念等を記載した携帯用カードを新たに作成し、委託職員を含めた全職員に配布を行うことで、改めてセンター全体の意識改善に努め、患者や家族の立場に立った医療提供の徹底を図った。 ・ 新たに消化器内科等のセカンドオピニオン外来を開始するなど、患者が自らの治療に納得して様々な選択ができるよう更なる体制の充実を図った。 <p>【特記事項】</p> <p>【今後の課題】</p>
------------------	--

<p>中期計画</p>	<p>年度計画</p>	<p>自己評価</p>	<p>年度計画に係る実績</p>
<p>力 患者中心の医療の実践・患者サービスの向上</p> <p>院内の療養環境をはじめとする患者アメンティの向上や医療内容の平易な説明に努めるなど、患者・家族の立場に立ったサービスの提供を行う。</p>	<p>力 患者中心の医療の実践・患者サービスの向上</p> <p>院内の療養環境をはじめとする患者アメンティの向上及び患者・家族の立場に立ったサービスの提供に努める。</p>	<p>9</p>	<p>力 患者中心の医療の実践・患者サービスの向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新たにセンターの基本理念、運営方針・患者権利章典を記載した携帯用カードを作成し、委託職員を含めた全職員に配布した。基本理念や患者権利章典等について職員に再認識を促し、患者への医療の提供に役立てることで、より質の高い医療や患者サービスの向上につなげた。 ・ 患者数の増加や患者様の要望を受け、放射線科前廊下に長椅子を増設するなど、患者・家族の立場に立ったサービス提供に努めた。また、外来患者来院時における受付操作等のサポートを年間通じて実施した。 ・ これまで混合していた総合案内と面会受付の場所を切り離し、面会受付を単独化させたことにより、総合案内の混雑の解消を図った。 ・ 医師事務作業補助者を計画的に採用し、医師の事務負担軽減に努めることで、患者対応時間の確保や病状説明の充実等の患者サービスの向上を図った。
<p>○ 医療に関する情報の特性を踏まえ、インプフォーム・コメントやセカンドオピニオン外来等を通じ、患者やその家族が治療の選択・決定を医療者とともに主体的に行うことができるよう支援する。</p>	<p>○ インプフォーム・コメントを徹底し、患者の信頼と理解、同意に基づいた医療を推進する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 平成 27 年度目標値 入院患者満足度 90% 外来患者満足度 80% 	<p>9</p>	<p>・ 「患者権利章典」を院内掲示するとともに外来・入院案内やホームページに掲載し、患者や家族等への周知を継続した。また、病状や治療方針などを分かりやすく説明した上で同意を得ることに努めるなど、インプフォーム・コメントの徹底を図り、患者満足度の向上につなげた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 平成 27 年度実績 入院患者満足度 90.6% (平成 26 年度 91.1%) 外来患者満足度 81.3% (平成 26 年度 78.9%) <p>・ 患者や家族の要望に応じて診療録等の開示を引き続き行い、適切な個人情報取り扱いと信頼の確保に努めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 平成 27 年度実績 カルテ開示請求対応 135 件 (平成 26 年度 118 件)
<p>○ 患者が自らの治療に納得し様々な選択ができるよう、セカンドオピニオン外来の実施診療科の拡大を引き続き検討する。</p>	<p>○ 患者が自らの治療に納得し様々な選択ができるよう、セカンドオピニオン外来の実施診療科の拡大を引き続き検討する。</p>	<p>9</p>	<p>・ 平成 27 年 9 月より新たに消化器内科、泌尿器科のセカンドオピニオン外来を開始し、計 10 診療科においてセカンドオピニオンが実施できる体制を整備した。セカンドオピニオンを希望する患者・家族に対しては、当該診療科医師と協議した上で、積極的に患者を受け入れ、患者やその家族が治療の選択・決定を主体的に行うことができるよう支援した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ セカンドオピニオン外来について病院ホームページにて広報活動を行った。病院ホームページのトップページから 1クリックでセカンドオピニオン外来の紹介ページを閲覧でき、受診相談に当たり必要となる申込書・同意書を簡便にダウンロードできる運用をとるなど、セカンドオピニオン外来の利用促進に努めた。 ■ 平成 27 年度実績 セカンドオピニオン利用患者数 23 名 (平成 26 年度 24 名)

<p>○ 患者や来院者の立場に立ったアメニティの提供のため、分かりやすい院内表示などに努めるとともに、接遇研修の実施により、接遇に対する職員の意識の向上を図る。</p>	<p>○ 接遇に関する研修計画を策定し、外部講師による研修や自己点検を行うことで全職員の意識と接遇を向上させる。</p>	<p>・動作や言葉遣い、患者目線での対応等に関する外部講師による接遇研修を開催し、職員の接遇意識の向上を図った。</p> <p>■平成27年度実績 接遇研修参加者数 79人（平成26年度 108人） ※新たにセンター職員となった事務等が対象 ・外来患者案内を通じて事務職員が接遇及び外来患者の受入れ業務を学ぶとともに、病院職員としての自覚を高めることを目的として職員接遇研修（必修）を実施した。非常勤を含む事務職員が輪番で正面玄関において外来患者案内（1日2名×1時間）を実施し、またその研修内容についても報告書を作成して上司が確認を行うことで、接遇に係る意識と技術の向上を図った。自動再来受付機の受付補助や車いすの手配、診療科への案内、美化活動などを通して患者・家族と触れ合うことにより、安心で快適な医療環境の提供に努めた。</p>
<p>○ 患者・家族の満足度を的確に把握するため、患者満足度調査や退院時アンケート調査等を実施し、その結果の分析を行い、患者・家族の視点に立ったサービス改善を図る。</p>	<p>○ 職員文化祭（アート作品展示）や院内コンサートの実施、浴衣サロンの充実など、療養生活や外来通院の和みとなる環境とサービスの提供を行う。</p> <p>○ センターが提供する医療とサービスについて、患者サービス向上委員会を中心に検討し、ご意見箱や患者満足度調査などを活用しながら患者ニーズに沿った改善を行う。</p>	<p>・平成27年12月にセンター職員等によるクリスマスコンサート、平成28年3月に板橋区演劇家協会会員によるロビークンサートをそれぞれ開催した。</p> <p>・養育院・浴衣記念コーナーにおいて、利用者の健康と生活に役立つ知識の紹介、病室や治療法に関する理解を深めるための入院設備の写真パネルや貸出図書の充実を図った。また、センターの各種案内や板橋区観光ガイドマップを掲示するなど、休憩・待合スペース機能の充実を図った。</p> <p>・ご意見箱に寄せられた要望・苦情や患者満足度調査の結果について、病院運営会議に報告・検討を行うとともに、患者サービス向上委員会において改善策等について検討を行い、患者サービスの向上を図った。特に院内掲示や療養環境について、指摘された事項の情報共有と迅速な改善に取り組むなど、患者ニーズに応えられるよう努めた。</p> <p>■平成27年度実績（ご意見箱の集計） 意見・要望 93件（平成26年度 101件） 感謝 22件（平成26年度 35件）</p>

<p>1. 都民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためのべき措置</p> <p>(2) 高齢者の健康の維持・増進と活力の向上を目指す研究</p> <p>高齢者の心身の健康維持・増進と自立した生活の継続、また多様な社会活動における高齢者への力の発現のため、センターの健康長寿と福祉に関する研究を行い、高齢者の医療、看取りを含めたケア、健康増進の諸問題に包括的に取り組む。また、研究の実施に当たっては、センターの特色である病院との連携を強化して高齢者疾患の治療と予防に有効な臨床応用研究や技術開発を進めるほか、地域モデルの在り方に関する提案を行うなど研究成果の普及を図り、公的な研究機関としての役割を果たしていく。</p> <p>目標値:トランスレーショナルリサーチ研究課題 5 件/年</p>	<p>1. 都民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためのべき措置</p> <p>(2) 高齢者の健康の維持・増進と活力の向上を目指す研究</p> <p>高齢者の心身の健康維持・増進と自立した生活の継続、また多様な社会活動における高齢者への力の発現のため、センターの健康長寿と福祉に関する研究を行い、高齢者の医療、看取りを含めたケア、健康増進の諸問題に包括的に取り組む。また、研究の実施に当たっては、センターの特色である病院との連携を強化して高齢者疾患の治療と予防に有効な臨床応用研究や技術開発を進めるほか、地域モデルの在り方に関する提案を行うなど研究成果の普及を図り、公的な研究機関としての役割を果たしていく。</p> <p>目標値:トランスレーショナルリサーチ研究課題 5 件/年</p>	<p>1. 都民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためのべき措置</p> <p>(2) 高齢者の健康の維持・増進と活力の向上を目指す研究</p> <p>高齢者の心身の健康維持・増進と自立した生活の継続、また多様な社会活動における高齢者への力の発現のため、センターの健康長寿と福祉に関する研究を行い、高齢者の医療、看取りを含めたケア、健康増進の諸問題に包括的に取り組む。また、研究の実施に当たっては、センターの特色である病院との連携を強化して高齢者疾患の治療と予防に有効な臨床応用研究や技術開発を進めるほか、地域モデルの在り方に関する提案を行うなど研究成果の普及を図り、公的な研究機関としての役割を果たしていく。</p> <p>目標値:トランスレーショナルリサーチ研究課題 5 件/年</p>	<p>1. 都民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためのべき措置</p> <p>(2) 高齢者の健康の維持・増進と活力の向上を目指す研究</p> <p>高齢者の心身の健康維持・増進と自立した生活の継続、また多様な社会活動における高齢者への力の発現のため、センターの健康長寿と福祉に関する研究を行い、高齢者の医療、看取りを含めたケア、健康増進の諸問題に包括的に取り組む。また、研究の実施に当たっては、センターの特色である病院との連携を強化して高齢者疾患の治療と予防に有効な臨床応用研究や技術開発を進めるほか、地域モデルの在り方に関する提案を行うなど研究成果の普及を図り、公的な研究機関としての役割を果たしていく。</p> <p>目標値:トランスレーショナルリサーチ研究課題 5 件/年</p>
<p>中期計画に係る該当事項</p> <p>中期計画の進捗状況</p>	<p>中期計画の進捗状況</p>	<p>中期計画の進捗状況</p>	<p>中期計画の進捗状況</p>
<p>中期計画に係る該当事項</p> <p>中期計画の進捗状況</p>	<p>中期計画の進捗状況</p>	<p>中期計画の進捗状況</p>	<p>中期計画の進捗状況</p>
<p>中期計画</p> <p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>
<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p> <p>トランスレーショナルリサーチ推進室を中心として、萌芽的研究の発掘から臨床応用まで一貫して推進する体制を整え、病院と研究所との連携強化を図る。</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p> <p>トランスレーショナルリサーチ (TR) 研究採択課題の実用化を促進するために、センターとして TR 推進室の支援を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新たな健康増進法及び次世代の治療法や診断技術に繋がる基礎研究の推進を図るとともに、新規の TR 研究課題の募集及び研究支援を行う。 病院部門と研究部門双方からの研究活動の取り組みを啓発するために、TR 情報誌の定期発行やセミナー等を開催し、センター内二周知を図る。 <p>■平成 27 年度目標値 TR 研究課題採択数 5 件 TR 情報誌発行回数 4 回</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p> <p>トランスレーショナルリサーチ (TR) 研究採択課題の実用化を促進するために、センターとして TR 推進室の支援を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 新たな健康増進法及び次世代の治療法や診断技術に繋がる基礎研究の推進を図るとともに、新規の TR 研究課題の募集及び研究支援を行う。 病院部門と研究部門双方からの研究活動の取り組みを啓発するために、TR 情報誌の定期発行やセミナー等を開催し、センター内二周知を図る。 <p>■平成 27 年度目標値 TR 研究課題採択数 5 件 TR 情報誌発行回数 4 回</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p> <p>トランスレーショナルリサーチとして支援・助成してきたサルコペニア・チェックシステム (タブレット端末使用) が完成し、当センターのフレイル外来への設置を行った。また、患者へのデータのフィードバックや生活指導におけるその利用を開始し、当センターの医療の質の向上に寄与した。</p> <ul style="list-style-type: none"> 同じく支援・助成してきた高齢者が自宅において一人で実施可能な生活力向上のための体操 (ホームレクササイズ 2015) をまとめたDVDが完成し、普及の準備を開始した。 同じく支援・助成してきた血中GDF15測定法 (ELISA法) について、コホート研究での活用を開始した。 全職員向けにトランスレーショナルリサーチ (TR) 情報誌「Cross-link」を刊行した。 TR 推進会議で採択決定した 8 課題に対して研究費の支援を実施するとともに、進捗状況の把握に努め、実験支援及び研究情報の調査・提供などの技術支援を行った。 新規技術の実用化に向け、実施に際して障害となる関連特許を調査するなど、これまでに支援してきた研究課題に対して知的財産の側面からの調査支援も行った。 <p>■平成 27 年度実績 TR 研究課題採択数 8 件 (研究部門 2 件、病院部門 6 件) (平成 26 年度 15 件<研究部門 6 件、病院部門 9 件>) TR 情報誌発行回数 4 回 (平成 26 年度 4 回)</p>
<p>中期計画</p> <p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>
<p>中期計画</p> <p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>
<p>中期計画</p> <p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>	<p>トランスレーショナルリサーチの推進 (医療と研究の連携)</p>

<p>○ 東京バイオメーカー・イノベーション技術研究組合 (TOBIRA) 等を活用して産・学・公の連携を強化し、外部機関と積極的に知見・技術の情報共有や臨床研究の共同実施を行う。</p> <p>○ 病院部門と連携し、健康増進や尿失禁、低栄養予防プログラムのはじめとする研究成果の社会還元を図る。</p>	<p>○ TOBIRA で開催する研究交流フォーラム等を通じて、センターの研究内容や研究成果を広く多方面に情報発信するとともに、外部機関とのネットワークを構築し、共同・受託研究につなげる取組を推進する。</p> <p>■ 平成 27 年度目標値</p> <p>TOBIRA 研究発表数 (講演、ポスター発表) 8 件 外部資金獲得件数 230 件 外部資金獲得金額 (研究員一人あたり) 6,500 千円 共同・受託研究等実施件数 (受託事業含む) 65 件</p>	<p>・研究シーズの発信 (ホームページ) や、TOBIRA (※) との連携等により、トランスレーションショナル研究の促進に向け、有機的な情報交流をはかった。</p> <p>※ TOBIRA: バイオメーカー・イノベーション技術研究組合、東京都医学総合研究所などと平成 23 年 8 月に設立。</p> <p>■ 平成 27 年度実績</p> <p>外部資金獲得件数 216 件 (平成 26 年度 261 件) 外部資金獲得金額 (研究員一人あたり) 6,344 千円 (平成 26 年度 7,209 千円) 共同・受託研究等実施件数 (受託事業含む) 55 件 (平成 26 年度 75 件) ※ 平成 27 年度は TOBIRA の研究交流フォーラムが開催されなかったため、講演、ポスター発表等の研究発表は次年度フォーラムにて行う予定である。</p>
<p>○ PET 部門と放射線診断部門が連携し、認知症診断及びがん診断に有効な候補化合物を絞り込み、臨床応用に向けた評価を行う。</p> <p>○ 高齢者の頻尿や尿失禁の防止に最も効果的な非侵襲的皮膚刺激手法を見出し、頻尿・失禁患者に対する有用性を検証する。</p>	<p>○ 東京都、秋田県、医師会等と認知症の医療サービス強化と地域包括ケアシステム構築に関する政策学的研究を引き続き遂行する。</p> <p>○ 精神科と連携し、うつ病、妄想性障害など、高齢者の難治性精神疾患の病態解明と治療法の開発に関する臨床研究を引き続き遂行する。</p>	<p>・病院部門に設置した認知症支援推進センターで実施する、「認知症サポート医フォローアップ研修」、「認知症疾患医療センター相談員研修」及び「認知症支援」に関する研修の支援を行った。</p> <p>・うつ病や妄想性障害など、高齢者の難治性精神疾患の原因究明のため神経内科及び精神科と連携し、症例を収集して病態と治療の研究を行った。認知症の原因疾患の一つであるエオゾン好性核内封入体病については、皮膚生検による判別診断の有用性について、第 111 回日本精神神経学会及び第 30 回日本老年精神医学学会にて学会報告を行った。</p> <p>・乳がんの早期発見に有効な PET 薬剤である [18F]-FES の製造試験を完了した。今後、薬事委員会の審議を経て、当センターでの臨床使用が可能となる。</p> <p>(※) [18F]-FES: エストロゲン受容体を画像化する PET 薬剤。</p> <p>・FDG を用いたポジトロン断層撮影によるアルツハイマー病の診断 (先進医療 B) についての実施が厚生労働省先進医療技術審査部会において承認された。今後、ローカルモニターのトレーニング等終了後に提供を開始する予定である。【再掲: 項目 03】</p>
<p>○ 病理部と連携し、認知症の超早期診断に寄与する可能性がある画像バイオマーカー候補分子 (タウイメーキング) を選択し、その診断効果を評価する。</p> <p>○ 定期的な研究計画の進捗管理を行うとともに、外部の有識者からなる評価委員会も開催し、研究チーム等についての妥当性を検証する。</p>	<p>○ 高齢者の頻尿や尿失禁の防止に最も効果的な非侵襲的皮膚刺激手法を見出し、頻尿・失禁患者に対する有用性を検証する。</p>	<p>・民間企業との共同研究で製作したローリング器具が高齢者の頻尿等を改善する医療機器 (過活動膀胱抑制器具) として承認され、販売を開始し、研究成果の普及還元を努めた。(特開 2012-100844: 医療機器製造販売届出番号: 22833×100020000005)</p> <p>・脳内のタウタンパク質の局在を PET により画像化する目的で用いられるタウイメーキング剤 ([11C]PBB3) を使用した分析から、本薬剤が脳内のタウタンパク質を抽出する可能性が示唆された。今後、画像解析した脳の剖検材料を更に病理学的に解析し、PET 画像が真に本タンパク質の局在を示しているか検討を行い、実用化を視野に解析を進めていく。</p> <p>・外部有識者 (学識経験者、都民代表及び行政関係者等) 8 名から構成される外部評価委員会により、平成 27 年度の研究成果、進捗状況、中期計画期間における研究計画の実現可能性について評価を受けた。同評価結果については、次年度以降の研究計画の運営方針の作成、研究チーム・テーマ・長期戦略研究等の研究計画・体制等の見直し、研究費予算の配分等に活用した。</p> <p>・各研究チームの進捗管理及び情報共有のため、センター幹部による中間ヒアリングを実施した (平成 27 年 12 月)。</p> <p>ヒアリングは、特に中期計画に掲げる三つの重点医療 ①血管医療 ②高齢者がん医療 ③認知症医療) を中心に進められ、これらの分野において疾患の予防法や高度な治療技術の開発に寄与する研究となっているかについて、各研究者の技術背景や知識を最大限に活かしつつ、進捗管理を行った。</p>
<p>○ センター内部の委員からなる内部評価委員会において、研究の計画・成果及び継続、進捗管理等についての評価を行う。</p>	<p>○ センター内部の委員からなる内部評価委員会において、研究の計画・成果及び継続、進捗管理等についての評価を行う。</p>	<p>・内部評価委員会では、各研究チームの研究成果について、法人経営者及び現場のリーダーの立場から外部評価委員会と同じ評価項目により評価を行った。</p>

<p>中期計画の進捗状況</p>	<p>＜高齢者に特有な疾患と生活機能障害を克服するための研究＞</p> <p>【中期計画の達成状況及び成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PET薬剤のFDG及びPETにより、アルツハイマー病とレヴィー小体型認知症を画像識別する事に成功した。 ・脳臓や筋能組織において、悪性化への移行のリスク評価としてテロメア長の測定が有効である可能性が示された。 ・マウスを用いた実験において、ドネペジルとシロスタゾールの低容量併用により、低下した記憶力を回復させる効果が観察確認された。 <p>【特記事項】</p> <p>【今後の課題】</p>	<p>＜高齢者に特有な疾患と生活機能障害を克服するための研究＞</p> <p>【中期計画の達成状況及び成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PET薬剤のFDG及びPETにより、アルツハイマー病とレヴィー小体型認知症を画像識別する事に成功した。 ・脳臓や筋能組織において、悪性化への移行のリスク評価としてテロメア長の測定が有効である可能性が示された。 ・マウスを用いた実験において、ドネペジルとシロスタゾールの低容量併用により、低下した記憶力を回復させる効果が観察確認された。 <p>【特記事項】</p> <p>【今後の課題】</p>
------------------	--	--

中期計画	年度計画	自己評価	年度計画に係る実績
<p>イ 高齢者に特有な疾患と生活機能障害を克服するための研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ センターの重点医療（血管病、高齢者が心及び認知症）に関する基礎研究を推進し、治療や予防に有効な臨床応用研究への展開を図る。 	<p>イ 高齢者に特有な疾患と生活機能障害を克服するための研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 幹細胞移植による高齢者の心疾患治療の実現に向けた課題を明らかにし、基礎・臨床の両面から克服すべき課題に取り組み。 <ul style="list-style-type: none"> ・心血管組織由来細胞および幹細胞を用いた機能解析を行い、疾患モデル構築に有用なマーカー分子を選別する。 ・新たに同定した老化指標分子マーカーによる幹細胞の品質管理、安定性評価を行い、心疾患モデルマウス開発へ応用する研究を行う。 ○ 胃がん、大腸がん、肺がん、乳がん、口腔内がん等の発生機序や病態をテロメア長との関係から解析し、診断、予防及び治療への有用性を評価する。 	<p>11 A</p>	<p>イ 高齢者に特有な疾患と生活機能障害を克服するための研究</p> <ul style="list-style-type: none"> ・血管内皮細胞の細胞老化に伴う細胞膜上の糖脂質GMI（ガングリオシドの一種）の発現亢進が、インスリン抵抗性を生じさせる一因となっていることを見出すとともに、GMIの発現が血管の老化指標となることを見出し、血管病の発症予防に向けた有用な疾患マーカーとしての可能性が示唆され、論文発表を行った。 ・繊維芽細胞と組織幹細胞において、細胞の状態に応じて細胞膜上の特定の糖鎖構造に変化が起きることを見出し、論文発表を行った。この発見は、今後細胞移植を行う上で細胞の質を評価する指標として期待される。 ・心エコー法による生理学的評価法の妥当性について、心筋梗塞モデルマウスを用い、組織学的評価と照らし合わせながら検討するなど、補助人工心臓治療と心筋再生医療を組み合わせたハイブリッド治療戦略の推進に努めた。【再掲：項目01】 ・腫瘍がん病変部周辺の形態異常がみられない腺管組織においても、腫瘍がん組織と同様にテロメアが短くなっていることが明らかとなった。この結果から、がん化に先行してテロメア長の短縮、ひいては染色体不安定性が高まっている可能性が示唆された。 ・膀胱腫瘍において、形態的に悪性化が観察される前からテロメアの短縮が起きている事が見出され、がんの悪性とテロメア長短縮による染色体不安定性の増加との関係が示唆された。 ・抗がん剤耐性前立腺がん細胞で発現が低下しているmiR-130aを導入することにより細胞死が誘導されたことから、miR-130aは前立腺がんの新たな治療標的となることを見出した。 ・ヒト脳由来培養細胞株（アストロサイトマウ-251M）において、cAMP誘導体のdibutyryl cAMP (dbcAMP) が、タンパク質中のアルギニンをシトルリン化するPAD（※）2とPAD3の発現を顕著に誘導することが明らかとなった。この結果から、中枢神経系におけるPADのcAMPによる制御機構の存在が示唆された。（※）PAD：ペプチジルアルギニンデアミナーゼ ・マウスを用いた実験から、既存の認知症治療薬ドネペジルと、シロスタゾールについて、それぞれの単独投与では薬効が現れない低投与量であっても、両剤を併用することにより、低下していた記憶力が回復する効果が現れることを見出した。この結果から、ヒトにおける2剤の低容量併用といった、副作用のリスクを抑えた投与法が期待できる。 ・マウスへのシロスタゾールの長期投与により、脳への[18F]FDGの取り込みが増加する事が明らかとなった。この結果から、シロスタゾールは、脳のエネルギー源であるグルコースの取り込みを促進し、脳機能を改善する可能性が示唆された。 ・記憶のメカニズムを明らかにすべく、記憶関連分子であるERK2を、マウス小脳プルキンエ細胞に限定的にノックアウトしたモデルマウス（ERK2-KOマウス）を作出した。本モデルマウスを解析した結果、自閉症の表現型を示す事、また、ERK2は骨を受容する有毛細胞の生存に重要である事を見出した。 ・ヒトでは解析が困難な「転倒」をマウスで解析する新手法を開発した。これを用いた研究から、アルツハイマー病モデル動物においては、ワーキングメモリーの障害により転倒が増加するという転倒のメカニズムを見出した。 ・細胞へのペーサーアミロイド刺激により発現が増加するKLC1Eは、KLC1Dと競合して、アミロイド前駆体タ

【項目11】

<p>○ 高齢者疾患やサルコペニアなどによる身体機能低下の機序を解明し、生活機能障害に関する機能改善や予防法を提言する。</p>	<p>○ プロテオーム解析により、動脈硬化、糖尿病、糖尿病、健康長寿に関連するタンパク質とその分子修飾を解明し、疾患・健康長寿バイオマーカーを探索する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・二次元電気泳動法による動脈中膜変性組織のプロテオーム解析を行う。 ・糖尿病患者と糖尿病モデルマウスの血液のグライコプロテオミクス解析を行い、共通する変化を抽出する。 ・長寿モデルと考えられる105歳以上の超百寿者血漿サンプルを用い、グライコプロテオミクス解析(糖タンパク質のプロテオーム解析)を行う。 	<p>タンパク質 (APP) の輸送を阻害する事が示唆された。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認知症治療薬のコーリンエステラーゼ阻害薬、ニコチン受容体PAM、ニコチン受容体作用薬の脳皮質下での作用を調べた結果、皮質下の線条体ではPAMが効果的にニコチン受容体の作用を増強することが明らかとなった。 ・中枢神経系においてドーパミンD1受容体からPKA (※) を介する新たなドーパミンシグナル伝達経路が存在し、そのシグナルは神経活動の興奮性を増し、行動学習の変化も起こすことを示し、重要な生理機能を持つことを発見した。 (※) PKA: プロテインキナーゼA、cAMP依存性タンパク質リン酸化酵素であり、細胞内のシグナル伝達を担う。 ・ブレインバンク検体の解析から、アルツハイマー病脳ではアミロイドβ (Aβ) を産生する酵素であるBACE1のバイセクト型糖鎖が増加している事が判明した。アルツハイマー病モデルマウスの解析から、BACE1の同糖鎖が増加すると、アミロイド前駆体タンパク質 (APP) のβ切断が促進され、脳内のAβが増加することが判明した。 ・大動脈の中脈組織外膜側において、酸化ストレスの低減を担う抗酸化タンパク質の発現が増加していることが判明した。この事から、中脈組織外膜側が酸化ストレスに晒されやすい環境となっている可能性が示唆された。 ・独自に開発した分析技術である“OG1cNAc化修飾検出法”を更に改良した結果、これまでのOG1cNAc化タンパク質 (※) の検出や修飾部位の同定のみならず、タンパク質分子中の修飾率の定量が可能となった。 (※) OG1cNAc化タンパク質: 翻訳後修飾により、タンパク質の一部にOG1cNAc糖鎖が結合したタンパク質のこと。OG1cNAc化は、糖尿病、がん及び神経変性に関与することが明らかとなっている。
<p>○ サルコペニア及び神経筋難病に焦点を当て、早期診断のバイオマーカーの解析を進め、運動機能低下の予防法や治療法開発の基盤研究を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動神経細胞や筋細胞株を樹立し、機能の維持機構及び代謝調節の分子機構を解析する。 ・モデルマウスや剖検例のゲノム及びエクソーム解析によって、新規の骨粗鬆症や高齢者疾患に関連する遺伝子を探索する。 	<p>○ サルコペニア及び神経筋難病に焦点を当て、早期診断のバイオマーカーの解析を進め、運動機能低下の予防法や治療法開発の基盤研究を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・運動神経細胞や筋細胞株を樹立し、機能の維持機構及び代謝調節の分子機構を解析する。 ・モデルマウスや剖検例のゲノム及びエクソーム解析によって、新規の骨粗鬆症や高齢者疾患に関連する遺伝子を探索する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・サルコペニアなどの筋萎縮疾患群の早期診断に有効な血清バイオマーカー-MuSK (※) が神経筋難病の疾患モデルマウスの血中で増加することを質量分析装置で明らかにした。 ・高齢者血清中のMuSKがサルコペニアの発症と関連して変動することが示唆された。 (※) MuSK: 筋特異的チロシンキナーゼ ・日本人の大腿骨折リスクを、骨粗鬆症関連遺伝子多型5種類の遺伝子変異(SNP)により予測するGenetic Risk Score (GRS; 平成26年度開発) を用いて分析した結果、男性骨粗鬆症患者の骨折リスクの予測に役立つ可能性が示された。
<p>○ P E Tを用いて、血管病やがん、認知症の病態を評価する新しい診断法を開発する。</p>	<p>○ 加速度計付身体活動測定器で測定された日常生活活動と老年症候群との関係について、健康長寿に最適な生活習慣を解明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者における日常生活活動と、体温、睡眠、メンタルヘルス(うつ病)および生活機能(自立度・QOL)との関係を統計学的手法を用いて解析し、普及方法を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の身体活動と体温と睡眠(不眠症含む)の状態について、心身の健康、特に生活習慣病(高血圧症、糖尿病、脂質異常症等)との関連性を調べ、身体活動の量と質が高く維持されれば体温が上昇し、それによる免疫力増加などにより、病気の予防につながる可能性が示唆された。また、高齢者における特定の乳酸菌飲料等の過去15年間の摂取状況、既往歴、喫煙、飲酒状況、体力指標(歩行速度など)、栄養摂取状況、排便状況及び24時間の身体活動量を調べた結果、同乳酸菌を含有する飲料を週3回以上、10年間以上摂取した場合、高血圧発症が抑制される可能性が示唆された。
<p>○ 認知症の早期診断法・発症予測法を確立し、客観的な介入効果判定法も開発する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フッ素18標識アミロイド診断薬に関する臨床研究を開始する。 ・健康老年人(100名)のPETによる追跡を継続する。 ・レビ-小体病とタウオパチ-症例におけるPET画像の蓄積と解析を行う。 	<p>○ 認知症の早期診断法・発症予測法を確立し、客観的な介入効果判定法も開発する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・フッ素18標識アミロイド診断薬に関する臨床研究を開始する。 ・健康老年人(100名)のPETによる追跡を継続する。 ・レビ-小体病とタウオパチ-症例におけるPET画像の蓄積と解析を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アミロイドイメージング剤[18F]-Flutemetamolの臨床導入(AMEDブレクリニカルAD研究)にあたり、合成装置の薬機承認に伴う装置のバージョンアップが完了し、学会施設認証を取得した。これにより、国際多施設共同研究・国際治験への参加が可能となった。 ・FDG-PETが、軽度認知障害(MCI)から認知症への移行を高い精度で予測できることを多施設との共同研究で明らかにし、論文報告した。 ・健康老年人約100名の10年に渡る追跡が終了した。また、新規PETカメラと3T(テラ)MRIのデータベースの構築が完了した。これまでに取得したデータをAMEDレジストリー(※)に登録するとともに、今後、アミロイドPETによるデータを追加することで、バイオマーカーの裏付けのある健康者群データベースとして多くの研究者が利用できるようになる。

<p>(※) AMEDレジストリー：日本医療研究開発機構 (AMED) が提供する疾患登録システム。</p> <p>・FDGおよびドパミントランスポーター診断薬 [11C] PETを用いたPET解析から、アルツハイマー病とレビー小体型認知症では脳内の機能相関のパターンが異なっており、障害を受ける脳内領域が異なっていることが示された。</p>	<p>・PET薬剤 1 TMMを用いて、脊髄小脳変性症、パーキンソン病およびアルツハイマー病を対象とした臨床研究を開始した。脊髄小脳変性症においては、1 TMMによるmGluR1密度の低下の評価が、MRIによる脳萎縮の評価に比べて高感度に検出できることを示した。また、パーキンソン病患者においては、1 TMMによるmGluR1密度の低下を、小脳半球と頭頂葉・側頭葉で捉えることに成功した。</p> <p>(※) 1 TMM：代謝型グルタミン酸受容体1型 (mGluR1) を可視化するPET薬剤。</p> <p>(※) mGluR1：中枢神経に広く存在し、記憶や学習など様々な働きをもつタンパク質であり、脳の神経細胞の損傷にこのタンパク質の減少が関係する。</p> <p>・脳内のタウタンパク質の局在をPETにより可視化する目的で用いられるタウイメージング剤 ([11C]PBB3) を使用した分析から、本薬剤が脳内のタウタンパク質を抽出する可能性が示唆された。今後、画像解析した脳の剖検材料を更に病理学的に解析し、PET画像が真に本タンパク質の局在を示しているか検討を行い、実用化を視野に解析を進めていく。【再掲：項目10】</p> <p>・東北大学との共同研究により、タウオオハチーの新規トレーサーTHK5351の臨床使用を見据えた製造試験を開始した。</p> <p>・新規PET薬剤 Preladenant (※) と、同じくPET薬剤のCB184の世界初の初期臨床試験を開始し、ヒト脳内における両薬剤の集中領域の可視化に世界で初めて成功した。</p> <p>・当センター職員が委員となりまとめた「アミロイドイメージング臨床使用ガイドライン」を、日本核医学会・日本認知症学会・日本神経学会との合同で発表し、アミロイドイメージングの普及に貢献した。</p> <p>(※) Preladenant：アデノシンA2A受容体の脳内局在を分析する目的で開発した新規PET薬剤。アデノシンA2A受容体は、睡眠やパーキンソン病の病態に関連するとされている。</p> <p>(※) CB184：トランスロケータタンパク質 (TSPO) のリガンドとなるPET薬剤。活性化ミクログリアの未活性化ベシジンアゼン受容体を可視化し、加齢に伴う神経変性や、神経炎症に伴うミクログリアの活性化を捉える。</p> <p>・がん診断のためのトレーサーとしての[18F]-4DST (※) 誘導体化合物の毒性試験 (単回静脈内投与毒性試験およびAmes試験) を実施した。</p> <p>・[18F]-4DSTの製造効率や安定性を高めるべく、[18F]-フッ素ガスを用いた新たな製造法の開発に着手した。</p> <p>※[18F]-4DST (4'-thiothymidine)：がん診断のための新規トレーサー</p> <p>・[18F]-FESの臨床使用に向けた製造試験を終了し、次年度の薬事委員会への申請に向けた準備を整えた。</p>		
<p>○ アミロイドイメージングに加えて、認知機能と関連が深いとされる神経伝達機能や神経可塑性・神経保護作用に着目したトレーサー (病態を画像化する際に体内に取り込みで追跡する物質) の新規開発及び導入を行い、認知症やうつ病の病態生理を解明する。</p> <p>・神経変性疾患に対するグルタミン酸受容体サブタイプ1 (ITIM) の臨床研究を実施する。</p> <p>・タウオオハチーに対する新規トレーサーの導入と臨床使用承認を経た初期評価を行う。</p>			<p>○ がん診断のためのトレーサーの新規開発及び導入を行い、がんの病態生理の解明に貢献する。</p> <p>・臨床応用を見据えた18F-4DST (4'-thiothymidine) 誘導体化合物の選択と初期評価試験を行う。</p> <p>○ 女性ホルモン (エストロゲン) のアッセイ 18 標識体 (FES) の臨床使用承認を経て、乳がんの病態生理研究を進める。また、エストロゲン受容体のβサブタイプに着目したPETリガンドを開発するため、新規化合物のデザインと合成、基礎評価を行う。</p>

<p>中期計画の進捗状況</p>	<p>＜活気ある地域社会を支え、長寿を目指す研究＞</p> <p>【中期計画の達成状況及び成果】</p> <p>・サルコペニック・オパシテイ（SO）の高齢者に対する運動及び栄養補充のRCT介入（無作為化比較対象試験）を行った結果、これらを合わせた包括的指導がSOの改善に有効であることが示されたほか、DASC-21を用いた認知症初期支援プログラムのデキストの作成を行い、認知症支援事業の準備を進めるなど、高齢者のQOLの維持・改善を目指して各種研究を推進した。</p> <p>・高齢者が児童に対して行う「絵本の読み聞かせ」について7年間の長期介入研究を行い、世代間交流が健康寿命延伸のための一施策として有効である事を立証したほか、世代間交流やソーシャル・キャピタル（SC）を定量的に評価することが出来る「地域の子育て支援行動尺度」を開発するなど、地域高齢者の社会参加活動を促進する各種システムのモデル開発・評価に向けた取組を進めた。</p> <p>【特記事項】</p> <p>【今後の課題】</p>
------------------	---

中期計画	年度計画	自己評価	年度計画に係る実績報告
<p>ウ 活気ある地域社会を支え、長寿を目指す研究</p> <p>(7) 安心して生活するための社会環境づくりへの貢献</p> <p>○ 高齢者の社会参加や社会貢献活動が健康長寿に及ぼす影響を研究する。また、虚弱化予防などのプログラムを開発するとともに、それらのプログラムを活用した社会システムを提案するなど、超高齢社会における諸問題の解決に役立つ。</p>	<p>ウ 活気ある地域社会を支え、長寿を目指す研究</p> <p>(7) 安心して生活するための社会環境づくりへの貢献</p> <p>○ 地域高齢者の社会参加活動や社会貢献活動を促進するコーディネート・支援システムのモデル開発・評価に向けた取組を推進する。</p> <p>・世代間交流活動やソーシャル・キャピタル(SC) について多面的に行なった検証結果を基に、社会参加や社会的孤立の社会的経済的な側面からの評価を行う。</p> <p>・都内及び都内近郊のコホートにおいて、高齢者の社会的孤立に関する調査・予防、疫学研究を継続し、新たな社会参加プログラムを提案する。</p> <p>○ 地域高齢者における虚弱化のプロセスの解明に関する縦断研究を継続するとともに、その成果を公表していく。</p> <p>・縦断研究データに基づいて虚弱化の類型化を試み、それぞれの関連要因を明らかにする。</p> <p>・モデル地域における虚弱化予防の実証実験結果を踏まえ、健康寿命を支える地域社会システムを提案する。</p>	<p>12 B</p>	<p>ウ 活気ある地域社会を支え、長寿を目指す研究</p> <p>(7) 安心して生活するための社会環境づくりへの貢献</p> <p>・高齢者がボランティアが児童に対して絵本の読み聞かせを行う世代間交流研究（REPRINTSくりぶりんと）における7年間の長期介入効果として、高齢者の心身社会的機能の一部が維持・改善することが示された。また、こうした高齢者の長期的なボランティア活動を支援するコーディネーターネットワークを作成し、ホームページにも掲載して社会に幅広く還元した。</p> <p>・高齢者と子育て世代との世代間交流やソーシャル・キャピタル（SC）の醸成に向けて、その評価尺度となる「地域の子育て支援行動尺度」を開発し、信頼性・妥当性の検証を行った。</p> <p>・都内及び都内近郊の結果、高齢者の就業はフルタイム、パートタイム共に健康維持に有効であり、就労からの離脱は精神的健康は短期的に低下し、生活機能は長期的に低下することが明らかとなった。</p> <p>○ 群馬県大市で行った縦断研究では、新たに82名の新規追跡コホートを追加し、1,866人の高齢者について合計8049回の調査データを構築した。これを用いて、身体機能および認知機能の虚弱化の類型化を行うとともに、その関連要因を明らかにし、老年学専門雑誌に論文発表した（J Gerontol Med Sci）。</p> <p>・JAHED（※）のデータを用いてBMI（Body Mass Index）の加齢変化の類型化を行うとともに、その関連要因を明らかにし、疫学専門雑誌に論文発表した（Am J Epidemiol）。</p> <p>※JAHED：1987年から行っている当研究所が国内外の大学と共同で実施してきた全国高齢者パネル調査。</p> <p>・DASC-21（※）を用いた認知症初期支援プログラムのデキストを作成し、これを活用した認知症支援コーディネーター・アウトリーチチーム事業を東京都内の区市町村で実施するための基盤整備（人材育成と事業評価システムの確立）を進めるとともに、同事業の質の評価を開始した。</p> <p>(※)DASC-21：地域包括ケアシステムにおける認知症評価シート。（Dementia Assessment Sheet in Community-based Integrated Care System, DASC; ダスク）</p> <p>・認知症当事者の生活実態調査委員会を設置し、実態調査とそれを施策に反映させるための方法論の検討を行うとともに、全国6地域においてパイロット調査を実施した。(※) 事業名：平成27年度老人保健推進費等補助金老人保健健康推進事業（厚生労働省）「認知症の人の視点を中心とした生活実態調査及び認知症施策の企画・立案や評価に反映させるための方法論等に関する調査研究事業」</p> <p>・地域の実情に応じて認知症疾患医療センターの効率的な運用と質の確保をめざし、「認知症疾患医療センターの実態に関する調査研究委員会」を立ち上げ、今後の認知症疾患医療センターの類型と機能のあり方や質的管理の方法論を提言した。</p>

<p>○ 高齢者の健康維持・増進、在宅療養生活支援に資する研究を進めるとともに、要介護者のケアの在り方に関する体制づくりや質の向上を目指す。</p>	<p>○ 生活機能低下を防ぐリハビリテーション、看護技術、心理社会的支援、生活指導、権利擁護の実態を調査し、研究の焦点を絞る。</p> <p>○ 終末期の意志決定支援プログラム「ライフデザインノート」を用いた実践的研究の施行を通じ、汎用性向上に向けた課題や、制度上の課題を分析する。</p> <p>○ 福祉施設での良質な看取りの実現に向け、「反照的習熟プログラム」の効果検証を行いつつ、実践者への還元を促進する。</p> <p>○ 地域包括ケアシステムの導入に係る課題とその対応策を検討するた め、地域単位で医療・介護ニーズを分析・検討する。</p>	<p>(4) 災害時における高齢者への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 東日本大震災の経験に基づく課題分析を行い、将来の災害発生時や発生後の中・長期の被災高齢者の健康維持（孤立・虚弱・うつ予防など）に有用な支援策や行政の対応の在り方を提案する。 <p>(4) 災害時における高齢者への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> 被災地のニーズを把握し、仮設住宅や復興住宅などに居住する居住高齢者を対象とした介護予防講座の実施や、福祉サービスとの再建に関わっている専門職への支援活動を継続する。 都内介護サービス事業者への防災対策調査から得られたデータをもとに作成された災害時の対応に関する報告書を行政機関などに配布する。
<p>〔事業名：平成27年度老人保健推進費補助金老人保健健康増進等事業（厚生労働省）「認知症疾患医療センターの実態に関する調査研究事業」〕</p> <p>・サルコペニック・オベシテティ（SO）（※）の高齢者137名に対し、運動および栄養補充（アミノ酸+カタレキニン）のRCT介入（無作為化比較対照試験）を行ったところ、体脂肪率の減少や虚弱の改善がみられるとともに、Leptinの減少やVitamin Dの上昇など、血液成分の改善も同時に観察された。SOについては運動介入のみ、あるいは栄養介入のみでも改善するが、これらの両介入を組み合わせた包括的指導が効果的であることが明らかとなった。</p> <p>（※）サルコペニック・オベシテティ：全身性の骨格筋量や筋力の低下を特徴とするサルコペニア症候群に肥満が合併した症例。サルコペニア肥満。</p> <p>・在宅療養患者に対するコマニチュード（※）の有効性を調べるため、認知症状態が安定している患者の家族10名を対象に、ケア技術に関する研修を行うとともに、ケアの内容を示した資料を配付した。Behavior-AD（※）を用いた周辺症状（BPSD）の変化を調べたところ、3ヶ月後の暫定分析では患者のBPSDの低下が認められた。</p> <p>（※）コマニチュード：フランスで開発された知覚・感情・言語による包括的なコミュニケーションに基づいたケア方法。見る、話しかける、触れる、立つという4つの基本的なケア技術が柱となる。</p> <p>（※）Behavior-AD：1987年にReisbergらが開発したアルツハイマー病の精神症状の評価尺度。25項目について介護者からの情報により評価を行う</p> <p>・「ライフデザインノート」を用いた調査研究から、重篤な疾病に罹患している患者本人が自身の治療法を選択するにあたっては、その選択が、総じて家族の負担につながらないかという事を考慮して行われるという強い傾向（全体の9割強）がある事が明らかとなった。</p> <p>・これまでの研究成果を整理した報告書「看取りの振り返りを有効に実施するためのガイド～反照的習熟プログラムのおすめ～」を作成し、プログラム実施協力施設23か所と関東一都六県の1,777か所の特別介護老人ホーム施設に送付した。また、プログラムで使用する「看取りケア確認シート」等の書式をセンターホームページからダウンロードできるようにし、社会に幅広く還元できるよう努めた。</p> <p>・東京都後期高齢者医療広域連合の外来レセプトデータを分析した結果、東京都の75歳以上の高齢者では、二種類以上の慢性疾患を併せ持つ者が全体の三分の二を占め、内科疾患と整形外科・眼科疾患を併せ持つ患者が多いことから、医療機関や診療科間で医療情報を共有し、重複受診や重複検査の回避、多剤処方による薬剤有害事象の予防等、様々な対応策の必要性が認められた。</p> <p>・死亡前1年間の医療費と介護費用を分析した結果、より高齢で死亡した者では、医療費は安く、介護費用はやや高額であったが、医療費と介護費用の総額は低い事が明らかとなった。</p> <p>・介護保険サービス利用と施設入所の関連性を分析したところ、訪問系通所系サービス利用者では施設入所が遅いが、短期入所者では入所が早まっている事が明らかとなった。</p>	<p>(4) 災害時における高齢者への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> 宮城県気仙沼市、石巻市及び岩手県陸前高田市において、高齢者、施設・在宅サービスに関わる医療・福祉専門職及び一般市民に対して、医療・福祉サービスを復旧させるための包括的な研修講座を開催した。また、新しい介護予防体操を作成し、市民による体操普及の動機付け支援を行った。 東日本大震災に起因する施設への被害によって生じたサービスの低下を在宅診療連携を活用することで対応した宮城県気仙沼市の医師、歯科医師、薬剤師、医療関連専門職及び介護関連専門職の方々に対し、在宅医療の推進に係る調査を行い、その実態について報告書にまとめた。 	<p>(4) 災害時における高齢者への支援</p> <ul style="list-style-type: none"> 被災地のニーズを把握し、仮設住宅や復興住宅などに居住する居住高齢者を対象とした介護予防講座の実施や、福祉サービスとの再建に関わっている専門職への支援活動を継続する。 都内介護サービス事業者への防災対策調査から得られたデータをもとに作成された災害時の対応に関する報告書を行政機関などに配布する。

＜先進的な老化研究の展開・老年学研究におけるリーダージョブの発揮＞	
<p>【中期計画の達成状況及び成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 福山型先天性筋ジストロフィー症の原因遺伝子3つを同定するとともに、これらの遺伝子異常が本疾患の発症原因となることを解明するなど、基礎・医療の両分野にまたがる極めて重要な発見をした。 ・ O-マンノース型糖鎖の異常が網膜色素変性症の発症の一因となる事を解明し、本難病の治療法の開発に繋がる重要な発見をした。 ・ ミトコンドリア病の診断に有用とされる「GDF15 検出キット」が完成し、高齢者の骨折予防に貢献できる研究成果が得られた。 ・ 骨粗鬆症に係る5種類の遺伝子多型を分析して行う「大腿骨骨折リスク評価法（GRS）」を確立し、高齢者の骨折予防に貢献できる研究成果が得られた。 ・ 神経変性疾患の一つであるエオオゾン好性核内封入体病を皮膚生検により判別する診断基準の確立に向けて、有用な所見を見出す事ができた。 ・ 英文誌（GG1）において、当センターの論文全13編から構成される特集号を編集し、老年学・高齢者疾患に関する研究成果を広く世界に向けて発信した。 <p>【特記事項】</p> <p>【今後の課題】</p>	<p>【先進的な老化研究の展開・老年学研究におけるリーダージョブの発揮】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 国際宇宙ステーションきぼう実験棟への線虫観察装置（線虫の老化度、寿命を測定する装置）の打ち上げが成功し、実験プロトコールとデータ転送が予定通り行われた。地上へのサンプル回収も完了し、解析を進めている。 ・ ビタミンCの合成を司るSNP30遺伝子の欠損マウスと活性酸素を除去するタンパク質を作るSOD1遺伝子を欠損させたSNP30/SOD1ダブルノックアウトマウスの肝臓組織において、脂肪酸合成、中性脂肪合成、コレステロール合成及び脂質酸化を抑制する転写因子の発現減少が観察された。この結果から、生体内の酸化還元反応のバランス（レッドックスバランス）の不均衡が非アルコール性脂肪性肝疾患（NAFLD）の発症を誘引する可能性が示唆された。 ・ 久留米大学との共同で実施したビルビン酸ナトリウム療法法の第二相臨床試験に関連し、独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）の助言を受け、ランダム化プラセボ対照試験の実施準備を開始した。 ・ 当センター、神戸大学及び大阪府立母子保健総合医療センターとの共同研究により、福山型先天性筋ジストロフィー症（MD）の原因遺伝子として知られる3つの遺伝子に糖転移酵素活性がある事を発見し、これら酵素による形成される新規のO-マンノース型糖鎖構造を同定した。更に、この糖鎖が筋組織と中枢神経系の形成維持に重要な役割を演じ、その機能欠損によりMDが発症するメカニズムを解明した。 ・ O-マンノース型糖鎖の合成異常が網膜色素変性症（RP）の原因となることを発見し、MDとRPの発症に共通のメカニズムが存在することを明らかにした。 ・ 早老マウス（klotho遺伝子変異マウス）の腎臓組織の糖鎖変化と腎機能の関連について解析した結果、加齢に伴い、糖鎖や糖タンパク質の発現が変化することを明らかにした。 ・ これまでに開発した「血清GDF15測定ELISA法」に加え、体外診断薬としてより簡便な「ラテックス凝集比濁法」のキット開発が完了した。 ・ 高齢者約1200名の血清中のGDF15の測定結果から、GDF15が高い値を示す人は、総死亡のリスクが高いことが判明した。 ・ 百寿者432名、地域在住高齢者約5000名及び剖検2500例について、全エクソーム領域に存在するアミノ酸置換を伴う遺伝子多型24万個の解析を行い、カルシウム依存的に細胞外物質を取り込むTetranectinが長寿に関連することを確認した。また、中国の百寿者群と対照群においても類似の結果を得た。

中期計画	年度計画	自己評価	年度計画に係る業績報告
<p>Ⅱ. 先進的な老化研究の展開・老年学研究におけるリーダージョブの発揮</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 老化抑制化合物の同定及びその機序解明を目指し、老化の抑制や高齢者疾患の予防に効果のある老化関連遺伝子を探索する。 	<p>Ⅱ. 先進的な老化研究の展開・老年学研究におけるリーダージョブの発揮</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 動物、線虫、細胞等を用い、寿命や老化速度の調節、老化関連疾患に関わる遺伝子探索とその機能を解明し、老化制御・健康増進に資する物質を同定する。 ・ 寿命や老化速度の調節に関わる老化関連遺伝子を探索する。 ・ 食品からの抗酸化物質の摂取が老化制御に有効を調べるとともに、水素分子の作用機序の解明及びその投与の有効性について検討する。 ○ ミトコンドリア病に対するビルビン酸ナトリウム療法法の臨床試験を実施し、成人における安全性を確認すると共に、患者への有効性の評価を行う。 	13 A	<p>Ⅱ. 先進的な老化研究の展開・老年学研究におけるリーダージョブの発揮</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 当センター、神戸大学及び大阪府立母子保健総合医療センターとの共同研究により、福山型先天性筋ジストロフィー症（MD）の原因遺伝子として知られる3つの遺伝子に糖転移酵素活性がある事を発見し、これら酵素による形成される新規のO-マンノース型糖鎖構造を同定した。更に、この糖鎖が筋組織と中枢神経系の形成維持に重要な役割を演じ、その機能欠損によりMDが発症するメカニズムを解明した。 ・ O-マンノース型糖鎖の合成異常が網膜色素変性症（RP）の原因となることを発見し、MDとRPの発症に共通のメカニズムが存在することを明らかにした。 ・ 早老マウス（klotho遺伝子変異マウス）の腎臓組織の糖鎖変化と腎機能の関連について解析した結果、加齢に伴い、糖鎖や糖タンパク質の発現が変化することを明らかにした。 ・ これまでに開発した「血清GDF15測定ELISA法」に加え、体外診断薬としてより簡便な「ラテックス凝集比濁法」のキット開発が完了した。 ・ 高齢者約1200名の血清中のGDF15の測定結果から、GDF15が高い値を示す人は、総死亡のリスクが高いことが判明した。 ・ 百寿者432名、地域在住高齢者約5000名及び剖検2500例について、全エクソーム領域に存在するアミノ酸置換を伴う遺伝子多型24万個の解析を行い、カルシウム依存的に細胞外物質を取り込むTetranectinが長寿に関連することを確認した。また、中国の百寿者群と対照群においても類似の結果を得た。
<p>○ 遺伝子発現制御やタンパク質の分子修飾機構に関する先駆的な研究を遂行し、老化メカニズムを解明する。</p>	<p>○ 老化関連疾患の病態解明を目指し、RNA・タンパク質の発現及びタンパク質修飾の制御機構と生理機能を解明する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 廃用性および脱神経による筋萎縮、筋ジストロフィー症などの筋疾患患者モデルマウスと自然老化マウスにおける糖鎖構造を比較し、病態との関連性を解析する。 ・ 老化関連疾患を多発し短寿命となる遺伝子異常をもつklothoマウスにおける糖タンパク質の糖鎖構造の変化と、klothoタンパク質の機能変化との関連性について解析する。 ・ 長寿モデルと考えられる105歳以上の超百寿者血漿サンプルを用い、グライコプロテオミクス解析（糖タンパク質のプロテオーム解析）を行う。（再掲） ・ ミトコンドリア機能の指標となるバイオマーカーの探索を継続して行う。 		

	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者別例における全エクソソーム領域機能的(タンパク質アミノ酸置換を伴う24万個の)遺伝子多型の解析を行い、アルツハイマー病、パーキンソン病及び骨粗鬆症など的高齢者に特有の疾患の原因遺伝子の解明を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者別例における全エクソソーム領域機能的(タンパク質アミノ酸置換を伴う24万個の)遺伝子多型の解析を行い、アルツハイマー病、パーキンソン病及び骨粗鬆症などの高齢者に特有の疾患の原因遺伝子の解明を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 骨粗鬆症関連遺伝子多型5種類により日本人の大腿骨骨折リスクを予測するGenetic Risk Score (GRS:半年度開発)を用いて分析した結果、男性骨粗鬆症患者の骨折リスクの予測に役立つ可能性が示され、論文発表した。(J Bone Mineral Metab). ○ 順天堂大学脳神経内科の家族性パーキンソン病患者約500例と当センターの剖検2500例を比較し、全エクソソーム領域の機能的遺伝子多型について関連解析を行った結果、若年性パーキンソン病の病関連遺伝子として報告されているLRRK2 K2遺伝子について、高程度の遺伝子変異が見られる事が明らかとなった。 ○ 高齢者に多い神経疾患であるパーキンソン病の発症に深い関わりを持つLRRK2タンパク質について解析した結果、パーキンソン病の発症に、本タンパク質が脳内で増加することが明らかとなった。この結果から、LRRK2タンパク質がパーキンソン病の早期診断マーカーとなり得る可能性が示唆された。 ○ プラジカルサバワロ大学ブレインバンクより研究者2名を招聘し、人種や環境の差が脳の加齢変化に与える影響を解析する目的の共同研究を立ち上げた。
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 病院と研究所が一体であるセンターの独自性を発揮し、ブレインバンクを基盤に髄液、血清等を組合せたオリジナリティの高い、世界にも類のない高齢者コホートリソースを構築し、学術研究と臨床研究の発展に貢献する。 ■平成27年度目標値 高齢者ブレインバンク新規登録数 35例 バイオリソース共同研究数(高齢者ブレインバンク含む) 50件 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 病院と研究所が一体であるセンターの独自性を発揮し、ブレインバンクを基盤に髄液、血清等を組合せたオリジナリティの高い、世界にも類のない高齢者コホートリソースを構築し、学術研究と臨床研究の発展に貢献する。 ■平成27年度目標値 高齢者ブレインバンク新規登録数 35例 バイオリソース共同研究数(高齢者ブレインバンク含む) 50件 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者ブレインバンクなどの試料を広く活用し、高齢者疾患の病態解明や予防などの共同研究を推進する。
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 診断確定した消化管リソースの蓄積を継続して実施し、新たなバイオマーカーの探索や既存のバイオマーカーの組合せによる新規診断法の確立を目指す。 ・レビニ小体病の臨床診断のための外科材料や皮膚生検材料の有用性の検討をする。また、新しい認知症であるエオジン好性核内封入体病の皮膚生検材料の有用性を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 診断確定した消化管リソースの蓄積を継続して実施し、新たなバイオマーカーの探索や既存のバイオマーカーの組合せによる新規診断法の確立を目指す。 ・レビニ小体病の臨床診断のための外科材料や皮膚生検材料の有用性の検討をする。また、新しい認知症であるエオジン好性核内封入体病の皮膚生検材料の有用性を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 高齢者ブレインバンクなどの試料を広く活用し、高齢者疾患の病態解明や予防などの共同研究を推進する。
	<ul style="list-style-type: none"> ○ アルツハイマー病克服に向けた国際研究に参画するなど、国内外の多くの施設と連携し、アミロイドメーキングに関する研究や、世界で開発が始まったタウメライゼーションに関する研究を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アルツハイマー病克服に向けた国際研究に参画するなど、国内外の多くの施設と連携し、アミロイドメーキングに関する研究や、世界で開発が始まったタウメライゼーションに関する研究を推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学術論文の発表のみならず、老年学関連学会の運営にも積極的に関与するとともに、海外研究機関等との交流を進める。
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国内外の学会等において、研究成果の発表を著書に行うとともに、学会役員としての活動や学会誌の編集活動等により、老年学に関連する学会運営にも積極的に関与する。 ■平成27年度目標値 論文発表数 583件 学会発表数 832件 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国内外の学会等において、研究成果の発表を著書に行うとともに、学会役員としての活動や学会誌の編集活動等により、老年学に関連する学会運営にも積極的に関与する。 ■平成27年度目標値 論文発表数 583件 学会発表数 832件 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学術論文の発表のみならず、老年学関連学会の運営にも積極的に関与するとともに、海外研究機関等との交流を進める。
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国内のタウタウタンパク質の局在をPETにより画像化する目的で用いられるタウイメージング剤([11C]PBB3)を使用した分析から、本薬剤が脳内のタウタンパク質を抽出する可能性が示唆された。今後、画像解析した脳の剖検材料を更に病理学的に解析し、PET画像が真に本タンパク質の局在を示しているか検討を行い、実用化を視野に解析を進めていく。【再掲：項目10】 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国内のタウタウタンパク質の局在をPETにより画像化する目的で用いられるタウイメージング剤([11C]PBB3)を使用した分析から、本薬剤が脳内のタウタンパク質を抽出する可能性が示唆された。今後、画像解析した脳の剖検材料を更に病理学的に解析し、PET画像が真に本タンパク質の局在を示しているか検討を行い、実用化を視野に解析を進めていく。【再掲：項目10】 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 国内のタウタウタンパク質の局在をPETにより画像化する目的で用いられるタウイメージング剤([11C]PBB3)を使用した分析から、本薬剤が脳内のタウタンパク質を抽出する可能性が示唆された。今後、画像解析した脳の剖検材料を更に病理学的に解析し、PET画像が真に本タンパク質の局在を示しているか検討を行い、実用化を視野に解析を進めていく。【再掲：項目10】
	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日本老年医学会の公式英文誌“Geriatrics & Gerontology International (GGI)”において、当センターの論文全13編から構成される特集号を編集し、老化関連疾患マーカー、がん、糖尿病、テロメア、認知症、アトピー性皮膚炎、フレイル予防、世代間交流、サルコペニア予防、認知症支援、終末ケアなど多岐にわたる研究成果を広く世界に向けて発信し、学際的研究を活性化展開した。(GGI, Volume 16 Supplement 1, March 2016) ・ 米国老年学会、日本老年社会学会、日本基礎老化学会、日本老年医学会など国内外の学会へ積極的に参加し、研究成果の公表、普及啓発に努めた。 ・ 第29回日本老年学会総会(合同大会)の会長を理事長が務めたほか、第38回日本基礎老化学会大会や第57回日本老年社会学会大会の大会長を副理事長が務めるなど、老年学の推進に当センターが大きく貢献し、また多数の演題発表も行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日本老年医学会の公式英文誌“Geriatrics & Gerontology International (GGI)”において、当センターの論文全13編から構成される特集号を編集し、老化関連疾患マーカー、がん、糖尿病、テロメア、認知症、アトピー性皮膚炎、フレイル予防、世代間交流、サルコペニア予防、認知症支援、終末ケアなど多岐にわたる研究成果を広く世界に向けて発信し、学際的研究を活性化展開した。(GGI, Volume 16 Supplement 1, March 2016) ・ 米国老年学会、日本老年社会学会、日本基礎老化学会、日本老年医学会など国内外の学会へ積極的に参加し、研究成果の公表、普及啓発に努めた。 ・ 第29回日本老年学会総会(合同大会)の会長を理事長が務めたほか、第38回日本基礎老化学会大会や第57回日本老年社会学会大会の大会長を副理事長が務めるなど、老年学の推進に当センターが大きく貢献し、また多数の演題発表も行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 日本老年医学会の公式英文誌“Geriatrics & Gerontology International (GGI)”において、当センターの論文全13編から構成される特集号を編集し、老化関連疾患マーカー、がん、糖尿病、テロメア、認知症、アトピー性皮膚炎、フレイル予防、世代間交流、サルコペニア予防、認知症支援、終末ケアなど多岐にわたる研究成果を広く世界に向けて発信し、学際的研究を活性化展開した。(GGI, Volume 16 Supplement 1, March 2016) ・ 米国老年学会、日本老年社会学会、日本基礎老化学会、日本老年医学会など国内外の学会へ積極的に参加し、研究成果の公表、普及啓発に努めた。 ・ 第29回日本老年学会総会(合同大会)の会長を理事長が務めたほか、第38回日本基礎老化学会大会や第57回日本老年社会学会大会の大会長を副理事長が務めるなど、老年学の推進に当センターが大きく貢献し、また多数の演題発表も行った。

<p>■平成27年度実績 論文発表数 678件（平成26年度 612件） 学会発表数 1,377件（平成26年度 905件） 研究員1人あたり学会発表・論文発表数 22.3件（平成26年度 16.3件）</p>	<p>・科学研究費助成事業に74件申請し、20件採択された。新規採択率は27.0%で、対前年度比△7.9%であった。研究所では、平成28年度の採択率向上を図るべく、幹部研究員等採用時におけるグラント獲得力の重視を打ち出すとともに、研究フェローによる所属研究員への指導、特に若手研究員のグラント獲得力の向上に取り組んだ。</p> <p>■平成27年度実績 科研費新規採択率 27.0%（平成26年度 34.9%）</p>	<p>・センターの独自技術の社会還元をめざすべく、民間企業、大学、公設研究機関及び自治体等の外部機関との共同研究や受託研究、受託業務に積極的に取り組んだ。</p> <p>■平成27年度実績 共同研究、受託業務実施件数 55件（平成26年度 75件）</p>	<p>・カンザス大学（USA）、ドレクセル大学（USA）、サンパウロ大学（ブラジル）、メキシコ国立老年医学研究所（メキシコ）より国外研究員を各1名受け入れ、「老化神経筋接合部のアクティブゾーンの減損」、「高齢者による世代間交流プログラム」及び「日本とメキシコの高齢者の健康や生活様式の2国間比較研究」について研究を行った。</p> <p>・海外の国や自治体、大学（アメリカ、ブラジル、中国、台湾、韓国、タイ、メキシコ）から当センターの研究についての視察を積極的に受け入れ、老年学研究の一層の推進と国際的な老化・老年学研究の進歩への寄与を図った。また、将来的な共同研究の促進を図るなど、国際交流を積極的に図った。</p> <p>■国際学会での研究成果発表 203 課題/336 件</p>	<p>・「首都大バイオコンファレンス2015」（主催：首都大学東京生命科学専攻、平成27年11月6日）に参加し（講演1課題、ポスター発表5課題）、首都大学東京及び東京都医学総合研究所との研究交流の促進を図った。</p> <p>・所属研究チーム・研究チームのリーダーやベテラン研究員による指導・助言（OJT）を基本として、若手研究者の育成を行った。また、発表の機会が少ない若手研究者に発表の場を提供し、座長等の運営役も委ねて育成を図っていくことを目的とした「所内研究討論会」を年6回開催した。</p> <p>・連携大学院からの大学院生を受け入れ、若手老年学・老年医学研究者の育成に貢献した。</p> <p>■平成27年度実績 連携大学院生 6名（平成26年度 6名） 研究生 42名（平成26年度 46名）</p>
<p>○ 科学研究費助成事業など、競争的研究資金への積極的な応募により、独自の、先駆的な研究を実施する。</p> <p>■平成27年度目標値 科研費新規採択率 39%</p>	<p>○ 民間企業や大学、自治体等と連携し、老年学における基礎・応用・開発研究に積極的に取り組む。</p>	<p>○ 老年学関連の国際学会等での研究成果の発表や海外研究機関等との共同研究を促進するなど、国際交流を図る。</p>	<p>○ 連携大学院等から若手研究者を積極的に受け入れるとともに、指導やセミナーを通じて、次世代の中核を担う若手研究者の養成を図る。</p>	<p>○ センター内において、セミナーや研修など自己啓発の機会を提供するとともに、国内外からも研究員や留学生等の受け入れを行い、老年学研究においてリーダーシップを発揮する人材育成を図る。</p>

<p>中期計画の進捗状況</p>	<p>＜研究成果・知的財産の活用＞</p> <p>【中期計画の達成状況及び成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究成果に係るプレス発表や老年学・老年医学公開講座等のイベント活動のほか、新たな取組として若年層を対象とするサイエンスカフェを開催するなど、研究成果の普及やセンターのPRに積極的に取り組んだ。 ・理事長が第29回日本老年学会総会（合同大会）の会長を務めるなど、国や都、学会等における審議会や各種総会の委員としてセンター職員が積極的に参加し、政策提言や研究発表等を行うことで研究成果の社会還元に努めた。 <p>【特記事項】</p> <p>【今後の課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究所ホームページのレイアウトや内部構造について、ホームページアクセス数を増やしていくため、今後更に検討を行っていく。 ・センターの取組についてのPRを目的として、今後、養育院・浪沢記念コーナナーにおけるセンター職員の仕事の販売を検討していく。
------------------	---

中期計画	年度計画	自己評価	年度計画に係る実績報告
<p>オ 研究成果・知的財産の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 都民向けのセミナー、講演会の定期的な開催及び種々の広報媒体の活用により、研究成果や研究所に関する普及活動を積極的に行う。 	<p>オ 研究成果・知的財産の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 臨床と研究の両分野が連携できるメルिटを活かすため、健康長寿いさいき講座と老年学公開講座を統合し、「東京都健康長寿医療センター老年学・老年医学公開講座」を実施する。また、将来の科学者となりうる中高校生を対象とする、サイエンスカフェを新たに実施する。 ■平成27年度目標値 老年学・老年医学公開講座4回 出席者数2,500人 科学技術週間参加行事1回 150人 サイエンスカフェ1回 30人 	<p>14 B</p>	<p>オ 研究成果・知的財産の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・臨床と研究の両分野が連携できるメルिटを活かした「東京都健康長寿医療センター老年学・老年医学公開講座」を開催し、当センターが実施する最新の高齢者医療の紹介や認知症にやさしいコミュニケーション作り等について講演を行った。 ・文部科学省の推進する科学技術週間への参加行事として、平成27年度は「水素研究は科学が非科学か」をテーマに講演会を開催し、あわせて、各研究チームによるポスター発表を行い、積極的な研究成果の普及活動に努めた。 ・新たな取組として、糖鎖により血液型を調べる実験などの体験ができるサイエンスカフェ「～夏休み研究体験～集まれ！未来の科学者たち」を開催し、研究所の活動について若年層への周知を行った。 ■平成27年度実績 老年学・老年医学公開講座 4回 出席者数 1,721人（平成26年度6回/1,712人） 科学技術週間参加行事 1回 193人（平成26年度1回/109人） サイエンスカフェ 1回 20人 ・研究成果等を広く周知するため、マスコミに向けたプレス発表（5件）等を積極的に行った。（26年度3件） 「高齢者の自転車関連交通事故発生率とその傷害率—潜在的傷害事故の実態」（平成27年6月25日） 「超百寿者の血漿タンパク質糖鎖からみた健康長寿の秘訣」（平成27年11月12日） 「難病“網膜色素変性症”の原因となる遺伝子変異を発見」（平成28年2月19日） 「箱山型先天性筋ジストロフィー症の原因を解明」（平成28年2月25日） 「ローラーによる軽微な皮膚刺激が、過活動膀胱による高齢者の夜間頻尿を緩和することを発見」（平成28年3月28日）
	<p>○ ホームページを活用し、研究所の活動や研究内容及び成果を都民、研究者、マスコミ関係者などに広く普及させるとともに、外部機関との共同研究等も視野に入れ、研究シーズ集を引き続き公開する。</p> ■平成27年度目標値 ホームページアクセス数（研究所トップページ）55,000件		<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページに「1日より研究情報」（年6回更新）や「研究所NEWS」（年6回発行）、「講演会のご案内」などを掲載し、研究成果について都民、研究者、マスコミ関係者等に広く周知した。また、「研究シーズ集」の更新を行い、外部研究機関との共同研究等を促進した。 ■平成27年度実績 ホームページアクセス数（研究所トップページ）48,605件（平成26年度 52,082件）

<p>○ 審議会への参加などにより都をはじめとする自治体や国、公共団体への政策提言を積極的に行うほか、研究成果の社会還元を努める。</p>	<p>○ 研究所の広報誌「研究所NEWS」や各種講演集及び出版物を通じて、研究所の活動や研究成果を普及させる。</p> <p>○ 国や地方自治体、その他の公共団体の審議会等へ参加し、政策提言を通じて、研究成果の社会還元を努める。</p>	<p>・「研究所NEWS」、老年学・老年医学公開講座講演集（4冊）を発行し、研究所の活動や研究成果の普及に努めた。</p> <p>・国や自治体の審議会等に委員として多数参画し、政策提言等に関与することで研究成果の社会還元を努めた。</p> <p>■平成27年度実績 審議会等参加数 46件（国・自治体 21件、大学 2件、独法等 3件、学会 4件、その他 16件） （平成26年度 50件）</p> <p>・第29回日本老年学会総会（合同大会）の会長を理事長を務めたほか、第38回日本基礎老化学会大会や第57回日本老年科学学会大会の大会長を副理事長を務めるなど、老年学の推進に当センターが大きく貢献し、また多数の演題発表も行った。【再掲：項目13】</p> <p>・日本老年歯科医学会編集のガイドライン「認知症患者の歯科的対応および歯科治療の在り方：学会の立場表明」の作成に係るコアメンバーとして当センター職員が参画を行った。また、厚生労働省事業である「歯科医師認知症対応力向上研修」のプログラム作成について、日本歯科医師会と連携して取り組んだ。</p>
<p>○ 研究所の知的財産を適切に管理するとともに技術開発等の検討を行い、特許出願や研究成果の実用化を目指す。</p>	<p>○ 研究成果のさらなる特許取得や実用化を目指すとともに、先行特許等の調査や特許事務所との調整等、保有特許を適切に管理し、権利化による費用対効果を再検討する。</p> <p>■平成27年度目標値 特許新規申請数2件</p>	<p>・研究成果の実用化に向け、職務発明審査会を開催するとともに（6回）、大学、民間企業と共同で特許出願（新規1件）を行った。</p> <p>■平成27年度実績 特許出願（新規）1件（平成26年度 5件）</p> <p>「がん」においてドセキセル又はバシクリタキセルに対する耐性を評価する方法、がんの悪性化を評価する方法、及びそれら方法に用いられるキット」</p>
		<p>・介護予防主任運動指導員養成講習（1回）、フォロアップ研修（2回）を実施し、指導員の育成やスキルアップに努めた。</p> <p>・普及啓発活動の一環として「第74回日本公衆衛生学会総会」において事業の紹介ブースを出展し、普及啓発に努めた。</p> <p>■平成27年度実績 介護予防主任運動指導員（センター主催） 養成数 20名（平成26年度 16名） フォロアップ研修参加者数 86名（平成26年度 94名） 介護予防運動指導員（指定事業者主催） 養成数 1,710名（平成26年度 1,925名）</p>

<p>○ 臨床研修医や看護師など医療専門職を目指す学生に対する研修・実習体系の工夫や体制の充実を進めることにより、センター職員として専門志向が高く、意欲ある人材の確保と育成を図る。</p> <p>○ センターの理念や必要とする職員像に基づき、在職種について、専門性に応じた人材育成カリキュラムの体系化を図る。</p> <p>○ センターの理念や必要とする職員像に基づく研修計画を策定し、体系的な人材育成カリキュラムを実践する。</p> <p>○ 職員の業務に対する意識や職場環境などを把握するため「職員アンケート」を実施し、人材育成計画等に活用する。</p>	<p>○ センターの特長を活かした研修や実習を充実させることで、臨床研修医、看護師及び医療専門職に魅力ある職場環境を示し、人材の確保と定着を図る。</p> <p>○ センターの理念や必要とする職員像に基づく研修計画を策定し、体系的な人材育成カリキュラムを実践する。</p> <p>○ 職員の業務に対する意識や職場環境などを把握するため「職員アンケート」を実施し、人材育成計画等に活用する。</p>	<p>を図るとともに、将来的には20:1を取得できるよう医師事務作業補助者を3名採用し、平成27年度末時点で22名体制とした。また、勤務実績の優れた医師事務作業補助者については、非常勤から常勤へ雇用を切替えることで、人材の確保に努めた。</p> <p>・臨床研修医や看護師、医療専門職に向けた、実地医療に役立つ多様な研修や講演会を開催し、魅力ある職場環境の創出に取組んだ。</p> <p>※研修…全医師を対象としたお基のクルズス(勉強会)、臨床研修医及びび当直医を対象にした救急カンファレンス、臨床研修医を対象にしたアローアップカンファレンスや研究所職員による看護師を対象とした看護研究セミナーなど。</p> <p>※講演会…全職員を対象とした平成28年度診療報酬改定セミナー、研究所職員による看護師を対象とした看護研究セミナーなど</p> <p>・職務の遂行に必要な知識及び技能を習得するための研修を職種別に計画し、実施した。平成27年度は係長研修を都職員との合同研修(人材支援事業団が実施)に参加する方式に変更し、11名が参加した。主任研修は外部講師による研修をセンター内で実施しており、18名の職員が参加した。同研修においては、グループディスカッション形式を取り入れるなど工夫を行い、専門性やマネジメント能力の向上を図った。また、新規採用職員に対しては、新任職員研修として接遇マナーやメンタルヘルス、各部署の業務内容に関する説明等を実施した。</p> <p>・平成28年3月に全職員を対象とした「職員アンケート」を実施した。職場内のコミュニケーションや研修、福利厚生、経営意識や仕事に対するやりがいなどを問う全23項目からなるアンケートを配布し、職員の意識・意向の把握に努めた。</p> <p>・平成28年度に実施したアンケート結果において、研修に対する事務職員の高度な研修希望が多かったことを踏まえ、平成27年度は東京都が行う課長代理研修に当センターの職員を初めて参加させるなど、実際の業務運営への結果の活用に取り組んだ。</p>
<p>イ 次代を担う医療従事者及び研究者の養成</p> <p>○ 臨床研修医や看護師など医療専門職を目指す学生、連携六学院の学生等の受入れなどを通じて、センターが蓄積してきた高度な技術・成果を次世代の医療従事者及び研究者に継承し、今後の高齢者医療・研究を担う人材の育成に貢献する。</p>	<p>イ 次代を担う医療従事者及び研究者の養成</p> <p>○ 高齢者医療や研究におけるセンターの資源を活用し、センターの特長を活かした指導、育成体制を充実させることで、臨床研修医や看護師、医療専門職、研究職を目指す学生などの積極的な受入れ及び育成に貢献する。</p> <p>○ 医師や医療専門職等の講師派遣を通じて、高齢者医療への理解促進と次世代の医療従事者及び研究者の人材育成に貢献する。</p> <p>○ 連携六学院からの学生や大学・研究機関からの研究者を積極的に受け入れ、老年学・老年医学を担う研究者の育成に取り組む。</p>	<p>イ 次代を担う医療従事者及び研究者の養成</p> <p>・平成27年7月及び8月に医学生、研修医を対象とした「高齢医学セミナー2015」を2回開催した(平成26年度は1回)。内容は、各診療科の医師による高齢者医療の最前線や当センターにおける臨床研修医制度について講演を行い、今後の高齢者医療・研究を担う人材の積極的な受入れ及び育成に努めた。(参加者数:46名、平成26年度:27名)</p> <p>・看護学生を対象としたインターンシップ研修を2回実施し、79名の参加があった(平成26年度:88名)。高齢者医療の実践の場を提供することで、センターを広くアピールするとともに次世代を担う看護師の育成に貢献した。</p> <p>・モーニングカンファレンス、研修医のためのクルズス、臨床病理検討会、症例検討会等を実施し、教育体制の充実に努めた。症例検討会については、研修医のためのクルズス、臨床病理検討会、症例検討会等を実施し、教育体制の充実に努めた。症例検討会については、研修医のためのクルズス、臨床病理検討会、症例検討会等を実施し、教育体制の充実に努めた。</p> <p>・医療分野における国際交流の進展等に寄与することを目的に、外国人医師臨床研修制度による受入れ(英国人医師1名)を行った。</p> <p>・所属研究チーム・研究テーマのリーダーやベテラン研究員による指導・助言(OJT)を基本として、若手研究者の育成を行った。また、発表の機会が少ない若手研究者に発表の場を提供し、院長等の運営役も委ねて育成を図っていくことを目的とした「所内研究討論会」を年6回開催した。【再掲:項目13】</p> <p>・学部学生・大学院生等に関しては、研究生又は連携六大学院生として積極的に受入れ、研究指導を行うことで、将来の研究者たる学生の研究遂行力を育んだ。</p> <p>・医師や研究員を大学等に積極的に派遣し、高齢者の健康と福祉、社会参加等に関する講義や講演を多数実施すること</p> <p>で、高齢者医療への理解促進や知識の普及啓発に努めた。</p> <p>■27年度実績</p> <p>講演会等への参加に係る講師派遣件数 病院部門 317件(平成26年度 196件) 研究部門 496件(平成26年度 479件)</p> <p>・連携六大学院に関しては、新たに2施設(早稲田大学理工学術院、東邦大学理学研究科)と協定を締結した。</p> <p>・連携六大学院協定に基づき、連携六大学院から6名を受入れ、若手老年学・老年医学研究者の育成に貢献した。(平成26年度:6名)</p> <p>※協定先:東京農工科大学、首都圏大学、早稲田大学、早稲田大学大学院、早稲田大学薬科大学、明治薬科大学</p>

<p>ウ 地域の医療・介護を支える人材の育成</p> <p>○ センターの専門性を活用し、地域の医療と介護を支える人材の育成に貢献するとともに、地域の医療機関や介護施設等と連携した高齢者の在宅療養を支える人材育成の仕組みの構築を進める。</p>	<p>ウ 地域の医療・介護を支える人材の育成</p> <p>○ 他病院から看護師の受入れや看護地域セミナーの開催、認定看護師及び専門看護師による専門医療相談窓口「たんぼぼ」の活動を通じて、高齢者の在宅療養を支える人材育成に貢献する。</p>	<p>ウ 地域の医療・介護を支える人材の育成</p> <p>○ 認定看護師による専門相談窓口「たんぼぼ」について、セミナー・研修会等の場で周知し、訪問看護師等の専門職から電話相談を17件受け付け、高齢者の在宅療養を支える人材育成の一助としたほか、東京都ナースプラザ実習指導研修として9名、認定看護師教育課程研修として16名（認知症看護6名、皮膚・排泄ケア10名）、看護管理者研修として1名の看護師を受入れ、実習を行った。また、板橋区訪問看護ステーションより実習生7名を受け入れ、あわせてセンターより訪問看護研修生2名派遣した。</p> <p>○ センターの認定看護師と地域の訪問看護師のさらなる連携強化を目的とし、新たに「たんぼぼ会」を設置した。たんぼぼ会において、「たんぼぼ会の認定看護師による勉強会」を開催し、感染管理や皮膚排泄ケアに関する勉強会、病院と地域を結ぶ連携・協働に関する意見交換会を実施するなど、ケア能力の向上を図るとともに、患者が退院後も質の高い医療・ケアを継続して受けられるよう地域連携の強化を図った。【再掲4】</p> <p>○ 高齢者の看護ケア教育を充実させるため、タイ及びベトナムの国立・私立大学の教員を5名受け入れ、当センターの現任教育の受講や病院見学等を行った。</p> <p>○ 区西部の訪問看護ステーションの看護師などを対象に「病院と地域を結ぶ看護ケアセミナー」を2回開催し、地域の訪問看護ステーション、介護施設との連携強化と高齢者の在宅看護の協働を推進した。</p> <p>○ 認知症疾患医療センターとして、当センター内において認知症多職種協働研修を開催した。東京都西部から集まった様々な職種に対し、認知症支援に向けた認知症多職種協働の重要性について講義するとともに、演習形式での意見交換を行い、地域連携を支える人材の育成に努めた（参加者121名）。また、かかりつけ医認知症研修（年2回）や看護師等認知症対応力向上研修（年3回）など地域の医療従事者を対象とした認知症対応力の向上を図るための研修会を開催した。【再掲：項目03】</p> <p>○ 認知症支援推進センターとして、認知症サポート医フォローアップ研修（年2回）、認知症疾患医療センター相談員研修（年2回）、認知症支援コーディネーター研修（年2回）等の多様な研修会を開催した。また、各地域の認知症疾患医療センターが行う地域の医療・介護等専門職向け研修会に対する支援や評価検証のためのワーキンググループ等を開催するなど、認知症支援に携わる医療専門職等の認知症対応力の向上を図り、都内全域における認知症医療・福祉水準の向上に貢献した。【再掲：項目03】</p> <p>○ 島しょ地域における認知症対応力の向上に向け、センター職員が各島（利島、神津島、青ヶ島、御蔵島）へ直接訪問し、医療・介護従事者や地域住民等を対象とした研修会を開催した。また、医療・介護従事者との症例検討会、地域住民を対象とした認知症相談会を開催するなど、専門職が各島の地域特性に応じた研修等を行うことで、島しょ地域における認知症患者とその家族を支援する体制の構築に努めた。【再掲：項目03】</p> <p>○ 介護予防主任運動指導員養成講習（1回）、フォローアップ研修（2回）を実施し、指導員の育成やスキルアップに努めた。【再掲14-6】</p> <p>○ 自治体への広報普及啓発活動の一環として「第74回日本公衆衛生学会総会」においてブースを出展した。【再掲14】</p> <p>○ サーベス向上の一環として、平成25年度に開設した介護予防主任運動指導員・運動指導員・指定事業者専用ホームページの掲載情報を拡充した。</p> <p>■平成27年度実績</p> <p>介護予防主任運動指導員（センター主催） 養成数 20名（平成26年度 16名） フォローアップ研修参加者数 86名（平成26年度 94名）</p> <p>介護予防運動指導員（指定事業者主催） 養成数 1,710名（平成26年度 1,925名）【再掲：項目14】</p> <p>○ 病院と研究所の一体化のメリットを活かし、クローバーのさとの介護老人保健施設・訪問看護部門などとの連携体制の構築を進める。</p> <p>○ クローバーのさとの取材協力を得て、介護職が行うことができる医療行為について、高齢者の特徴、ケア方法、注意点等を踏まえ分かりやすく解説した書籍（「おさえたい介護スタッフができて医療行為」）を発行した。【再掲：項目06】</p>
--	--	--